

2016 年度社会構築論系
地域・都市論ゼミ 2 ゼミ論文

路地を守るのは誰か
— 神楽坂の路地空間を維持したまちづくり —

主査 浦野正樹教授

早稲田大学 文化構想学部
社会構築論系 4年
浦野ゼミナール所属

1T130227-2
岡 紗也華

目次

序章	4
序-1 問題意識	4
序-2 調査対象地	4
序-3 研究方法および論文形式	5
1 章 路地に関する先行研究	6
1-1 路地とは何か	6
1-2 都市の多様性と路地	6
1-3 路地をめぐる現状	9
2 章 神楽坂の概要	11
2-1 基本情報	11
2-2 沿革／歴史	11
2-3 まちづくりのルール	13
2-3-a 「神楽坂まちづくり憲章」	13
2-3-b 「神楽坂三・四・五丁目地区」地区計画	14
2-4 神楽坂の路地空間	15
3 章 神楽坂の記憶 ～3つの敗北～	17
3-1 まちの形が残った戦後の復興	17
3-2 若手が立ち上がった反対運動　－第1の敗北－	18
3-3 「粹な」まちづくりのスタート　－第2の敗北－	19
3-4 超高層マンション出現と路地の喪失　－第3の敗北－	21
4 章 神楽坂のまちづくり　～路地を守る～	25
4-1 まちをまとめる組織の誕生	25
4-2 まちを盛り上げる装置の多様化	28
4-2-a 地域内外のネットワークを構築するイベント	29
4-2-b 路地の魅力を普及するイベント	30

4-3 「地区計画」策定への道筋 —第4・第5の敗北—	32
4-4 ロケ地としての繁栄	33
4-5 まちの未来と路地を守るために.....	35
5章 神楽坂のこれから	38
5-1 神楽坂の今	38
5-2 今後の課題	39
終章	41
終-1 総括	41
終-2 謝辞	44
参考文献／参考 URL.....	45

序章

序-1 問題意識

路地空間に興味を示すようになったのは、大学進学とともに上京して東京で暮らすようになってからである。高層ビルが立ち並び、チェーン店が連なっている光景を見て、東京の街はどこも同じで面白くないと感じた。だからこそ、下北沢や高円寺など個性溢れる商店が並び、生活空間と商業空間に路地が残っている街に心惹かれるようになった。

そのような街を歩いている時に、車が入ってくることがないことの安心感や路地に溢れている生活感から、自分が懐かしさや落ち着きを感じていることに気がついた。近年、路地歩きを好む若者が増えているという話を聞くが、おそらく私と同じように懐かしさや落ち着きを感じ、路地に魅力にハマっているのではないかと考えている。また、路地に目を向けているのは若者たちだけでなく、まちづくりの面でも路地の重要性が述べられるようになってきているように思う。2003年からは「全国路地サミット」が年に1回開催されており、路地のまちづくりをしている人々が集まってシンポジウムを行っている。

しかし、路地があるということはその地区が前近代的な不良住宅地区であり、防災機能が劣る危険な地区であるとも指摘されている。2016年4月12日に発生した東京都新宿区歌舞伎町の飲食店街である新宿ゴールデン街の火災では、路地が狭く消防車が火元まで近づけず、消火活動に約4時間を要したという¹。以上のことから、路地を生かしたまちづくりを行っているまちで、誰がどのようにして路地を守っているのかということに興味をもち、ゼミ論文でのテーマとすることにした。

調査対象地としては花街から発展した路地が残存している神楽坂地区を選ぶことにした。神楽坂地区は、現在でも江戸情緒溢れる路地を残す街として有名であり、休日は通りが人で埋め尽くされるほどの人気エリアとなっている。また、平成に入り、高層ビルや再開発の波が押し寄せているが、街の景観を守ろうと商店会や地域住民が積極的に活動している地区である。神楽坂地区のまちづくり活動の変遷から路地を守るのは誰なのか、路地を生かしたまちづくりはどのように行われたのかを明らかにしたい。

序-2 調査対象地

特に花街から発展した路地が残る東京都新宿区神楽坂一丁目～五丁目(大久保通りと外堀通りに囲まれたエリア)を調査対象地とする。

なお、本論文では上記に定めたエリアを含む神楽坂一丁目～六丁目の地域を「神楽坂地区」と表記する。

¹ 東京新聞 2016年4月13日朝刊 『新宿ゴールデン街火災 狭い路地が消防車阻む 3棟燃え1人けが』から

序-3 研究方法および論文形式

【研究方法】

- ・ 文献調査
- ・ まちの関係者へのインタビュー
- ・ NPO 法人粋なまちづくり倶楽部主催イベントへのボランティア参加
- ・ 調査対象地でのフィールドワーク

文献調査に関しては、神楽坂で発行されているタウン雑誌、神楽坂ゆかりの作家の小説・楽曲、神楽坂が舞台のドラマ等も利用し、まちの変化やまちづくりの過程を表明したい。

また、地域のまちづくり活動に深く関わるため、NPO 法人粋なまちづくり倶楽部のボランティアとして『坂カフェ&まちあるき UDBB Car-Free holiday』『神楽坂 震災復興サロン 2016』『神楽坂まち舞台・大江戸めぐり 2016』に参加し、「そこで出会った方々へのインタビュー結果、フィールドワーク内容等も取り込んで執筆する。

【論文形式】

神楽坂のまちを分析する前に、1 章では路地に関する先行研究から路地空間がまちづくりの重要な要素として再評価されはじめた過程を、2 章では神楽坂の概要を確認しておく。3 章から 4 章にかけて本論文の中核部分であり、まちの変化を追っていくために戦後から現在までの神楽坂の出来事を時系列で書き記していき、その中で路地空間の変容やまちづくり活動の過程等を織り込んでいく方式にした。読者が本論文を読み進めていくと同時に神楽坂のまちが変化していく様子を頭の中で再現できたならば幸いである。また、3 章では神楽坂の人々の敗北の記憶、4 章ではその敗北によって生まれたまちづくり活動の活性化と組織連携を要点として書き進めている。そして、5 章では神楽坂のさらなる発展を願い、現在の姿と今後の課題を述べて終わりたい。

1 章 路地に関する先行研究

戦後の復興から人口増加・車社会へ対応するために、道路整備や再開発事業では、より広い道路、大きな敷地、高い建物が良いものとされ、都市開発が行われてきた。しかし、環境破壊、治安の悪化、近所付き合いの希薄化等が問題視されるようになり、今までの都市開発が否定されるようになってきた。そこで注目されるようになったのが、「ヒューマンスケールのまちづくり」である。また、本論文ではヒューマンスケールのまちづくりの中でも重要な要素である「路地」に着目している。ここでは、神楽坂の特徴でもある「路地」という空間が再評価されてきた過程を確認しておきたい。

1-1 路地とは何か

辞書的な意味で捉えると、「路地」とは「家と家との間の狭い道」のことを指す。岡本(2006)は「道路でもなく、宅地でもない隙間の部分。意図してつくられたわけではないが、そこに必要性がある残された空間」が「路地」であるとしている。また、「徘徊への期待のない場所は路地ではない」とも述べており、ただの狭い道ではなく人々の生活を感じられる公共的な場所であるとしている。これに近いものとして清水(1996)は、路地裏を「私的とも公的ともつかない共有領地的性格をもつ空間」と表している。路地裏では、その空間に面する家の人々の生活の気配を伺えることができ、互いに挨拶を交わしてお互いの生活もそれとなく知っているという関係が生み出されているのである。また、私たちが路地裏へ懐かしきなるものを感じるのは、そこに人々の生活の気配を感じ取れる「共有領地的性格」があるからだろうとも考えられる。

また、青木は、横丁や裏道などを「路地的空間」と総称し、その「路地的空間」と道路の性格・機能の差を4つの切り口から導き出している。その中で「路地的空間」は、①主として人の歩行のための空間装置であって人優先のもの②通過交通への対応が中心となっていないもの③沿道敷地の土地利用を可能とするための空間装置④沿道敷地と一体となつてその土地利用の利便性を増進するための空間装置、と表されている(宇杉・青木・井関・岡本2010,pp14-18)。

先行研究からもわかる通り、路地はただの狭い道ではなく、そこで暮らす生活者や利用者にとって必要な空間であると理解できる。

1-2 都市の多様性と路地

ジェイン・ジェイコブズは『アメリカ大都市の死と生』において、歩道の使い道について「治安」「ふれあい」「子どもたちをとけこませる」という3つの役割を見出している。「路地」も車が通れないヒューマンスケールのものであり、歩道と同じ役割をもっていると考え

ている。1つ目の「治安」に関して、歩道には監視する目があり、安全を確保されているという。歩道の監視者は数多くの見知らぬ人物であり、毎日変わる。そして、人々は普段の生活の中でこの安全性を複雑で無意識のネットワークによって維持されていると考察している。しかし、これらのネットワークがない、計画的に作られた住宅団地には監視が行き届かないために安全性は保証されず、沈滞するとされている。2つ目の「触れ合い」に関して、街路で交わす多くの接触が時間をかけて形成される信頼になるとされている。また、この信頼がないと必要とする時に交流や助けが得られないとしている。防犯や災害の際に信頼がないと近隣からの助けや協力が得られない、それを構築するにはささやかな接触が多数必要だと言っているのではないだろうか。「路地」は数々の接触により、信頼を生む場でもあり、郊外住宅の井戸端会議が開催される場として一体感を形成する場でもあると考えられる。3つ目の「子供たちをとけこませる」という使い道は、多様性をもった歩道で子供を遊ばせるということは、母親の監視がない場所で唯一の公共生活を経験できる場所となる。そこには、親ではない男性と女性で構成されるコミュニティの監視、つまり地域の監視の目があり、子供は伸び伸びと遊べるため非行率も低いという。また、どんな遊びの需要でも幅10から12メートルの歩道であれば満たすことができるとも述べられている。しかし、ほとんどの都市計画では母権社会を前提に計画するが、それが返って監視の目をなくすことに繋がり、子供たちの安全を守れなくなるという現状があると指摘している。「路地」は、決して自動車の入らない狭い空間であり、地域の目に囲まれながら子供が安全に遊べる空間と言えるのではないだろうか。

また、同書でジェイコブズは都市の多様性の条件として以下の4つの条件を上げている。

- ① 混合一次用途の必要性
- ② 小さな街区の必要性
- ③ 古い建物の必要性
- ④ 密集の必要性

まず、第1の条件として「混合一次用途の必要性」が挙げられている。一時用途の多様性はそれ自体が人々を運んで来て、二次適用との多様性も生まれる。この二次的用途とは、一時用途が引きつけた人々にサービスを提供する事業所の総称である。そして、一時用途の多様性が実際に機能するには、3つの要件を満たす必要があるとしている。その条件は、①「それぞれの時間帯の街路利用者が同じ街路を使っていること」、②「同じ街路を使う時間帯に利用する人々の間で部分的に同じ施設を利用している人々がいること」、③「ある時間帯の街路利用者の混合率が他の時間帯での街路利用の混合比率と近いこと」の3つである。また、住居系地域であっても居住と業務は補完しあい、昼間は従業者が、夜は住宅から人々が活気をもたらすとしている。

第2の条件は、「小さな街区の必要性」が挙げられている。小さな街区であると、街路や角を曲がる機会が多くなり、複雑な交錯利用の網の目を可能にしていることが、街路の賑わいをもたらすと述べている。

第3の条件は、「古い建物の必要性」が挙げられている。これは、地区は古さや条件が異なる建物が混在し、特に古い建物が混在することにより、経済利益と多様性が生まれるということである。地域に新しい建物ばかりであると、そこに立地できるのは高家賃を負担できる事業所ばかりになる。これでは画一的な風景が展開されることになる。新築ビルに入れるのは、老舗かチェーン店、十分な補助金が期待できる事業(ホール・美術館)に限定され、酒場、外国レストランや画廊・楽器屋は古い建物に入ることになる。大都市でみていて楽しいのは、古い地区を巧妙に新しい利用に適合させた地域であるとされている。また、古い建物の価値は長い年月によって作り出されるものであり、代替は不可能であるとも考えられている。よって、この多様性は活気ある都市近郊が過去の歴史から受け継ぐしかなく、維持し続けるしかないとされる。

第4の条件は、「密集の必要性」が挙げられている。これは、十分な密度で人がいることである。つまり、高密・規格化されていない密集性が必要であり、そこにいる人々がどういう目的でその場所にいるかは関係ないということだ。しかし、ここでジェイコブズは住戸の高密と住戸内の過密の違いについて詳しく言及している。この高密と過密の誤解が顕著に現れているのがスラム開発であり、再開発により住戸密度が抑えられて収納人数が減るため高密でなくなって追い出された人々が他の場所で過密を悪化させるからだという。しかし、住戸密度が高くなりすぎると建物の規格化が起これ、この多様性を抑圧するという。このことを鑑みると、高層マンションなどの上に高く伸ばして一つの場所により人が多く住めるようにするような建物も多様性を阻害する要因となっていると言えるだろう。

そして、最後にジェイコブズは「多様性は混沌ではなくそれは極めて発達した秩序形態を示す」ものだと述べている。たとえば、ニューヨーク五番街の40~59丁目では用途の違いがはっきりしており、多様なながらも全体では驚くほどまとまっているという。このように、多様性とは個々がバラバラであっても空間的に見るとまとまって見えるものであると考えることができる。

ここまでジェイコブズの都市の多様性の条件を見てきたが、4つの条件ともに「路地」がキーポイントとなってくるように考えている。特に注目したいのは「古い建物の必要性」の条件である。路地空間はまさに古い建物と新しい建物の混在を可能にしている場でありそれこそが多様性を生み出すもとになっていると考えることができる。その理由として「小間口性」がある。青木(2007,p3)は「小さな単位の集積によって構成されている街は小さな単位ごとの小さな投資によって維持・管理が可能であり、また仮に不具合が生じて、ピンポイントな修復・更新措置によって不具合の改善が可能になるという持続性の高さを具備している」と述べている。小間口の建物や路地等、小規模要素がまさに新と旧、和と洋といった対照なるものを混在させることを可能にしているのである。都市の多様性を生み出す装

置の一つとして「路地」という空間があげられると考えている。

1-3 路地をめぐる現状

ここでは、『路地からのまちづくり』（西村幸夫編著）から路地をめぐる問題とその現状を整理しておきたい。

小泉(2006)は、路地がなくなる理由を3つの論点としてまとめている²。

① 接道条件、2項後退問題

建設基準法の建物の接道条件である。42条では、「道路」は、原則4m以上の道路であると規定している。43条では、建築物は、その幅員4m以上の道路に2m以上接しなければならない。このため、通常幅員4m未満の道路(=路地)のみに面した建物の更新時は、建築基準法上の「道路」として認められる必要がある。

歴史的に古い路地の場合は、法制定時にすでに建物が立ち並んでおり、特定行政庁に指定したもの(通称、2項道路)は「道路」として認められる。しかし、この場合は将来4mの道路にするために道路の中心線から2m下がった「線」を道路境界として建築物を建築する必要がある。この全国一律的な制度が、路地のまちづくりを阻害することになる。

② 防災機能確保による路地の「しつらえ」の喪失

路地の幅員が4m未満であるならば、その代わり路地の建築物の高層化・耐火建築化を図り、防災機能を高めなければいけないという考えが根強く残っている。また、路地を多く残すまちは、防火地域ないしは準耐火建築物に指定されている場合が多い。防火地域に指定されている場合は、3階建てにする場合は防火構造が必要であり、外壁はモルタル等で防火被覆を行う必要がある。こうした防災・防火の観点から建築規制をおこなうことは、路地の魅力である「しつらえ」に関わる建築意匠の喪失に繋がる可能性がある。

③ 路地と大規模開発

大規模再開発や地域外の地権者の更新によって路地が消滅していくことである。小泉内閣は、都市再生の名のもとに大規模再開発を推進してきた。路地を「廃道」として敷地を統合して再開発を行う例が増えてきている。歴史的路地は、そこで暮らす人びとにとってのコミュニティ空間である。その路地が、地権者の要望に基づいているとは言え、行政の決定により、廃道になる。路地が廃道になったことは、周辺住民には知らされないまま開発計画が持ち上がる。計画が公になると反対運動が起き、廃道にされた路地の生活世界の空間装置としての必要性が初めて認識される。路地の重要性を認識し、公的

² 『路地からのまちづくり』 pp200～203 より引用

に積極的な位置づけを行うことが必要とされている。



路地喪失に至るイメージ図(筆者作成)

このように路地は防災機能を高めるため、都市再生の大規模開発のために排除されるという流れが主流になっている。また、3つの論点・問題はそれぞれが単発で生じているのではなく、同時に起きている場合が多いと考えられる。しかし、ジェイン・ジェイコブズが示しているように路地は多様性を生み出す装置として機能しているとともに、生活者のコミュニケーションの場となっている。このような考えが大規模再開発での路地の喪失から論じられるようになってきている。

2 章 神楽坂の概要

2-1 基本情報

神楽坂は新宿区の東北端に位置しており、東京都新宿区神楽坂 6 丁目～神楽坂 1 丁目に通っている神楽坂通りを軸として広がっている地域を指す。(本論文では 5 丁目から 1 丁目を主として扱う。) 地形的には、武蔵野台地の東端、牛込台地にある。北は神田川、東は旧江戸城の外堀に縁どられて、高低差 20m の起伏に富んだ地形上の坂の街である(山下・西村 2006)。

商店街の左右には花街と住居と商業の混在している商業地域が広がっている。駅周辺には大学や教育文化施設、公共施設などが集積している。また、地場産業である印刷・製本業が集まっている場所が近い。

早稲田大学・東京物理大学(現在の東京理科大学)・法政大学を控えていることから明治時代から文学的雰囲気も持っている。また、神楽坂近辺に下宿する文士も多かったため、夏目漱石『それから』『硝子戸の中』、北原白秋『物理学校裏』、泉鏡花『竜胆と撫子』等多くの文学作品に描写されている。

2-2 沿革／歴史

◆江戸時代

神楽坂のまちが整いだすのは、群馬から来た大胡氏が牛込城を構えたころである。徳川家光が寛永 12 年の江戸城拡張工事の総仕上げの際、牛込御門通りが開通したことをきっかけに現在に近い街の骨格ができる。阿波徳島藩主蜂須賀忠英が幕府の命令により寛永 13 年に牛込見附と牛込橋を築いた。これが完成したことで交通の要所である牛込見附を基点とし上州道に通じる牛込御門通りが整備され、これが後に神楽坂通りと呼ばれる道である。江戸時代は、毘沙門天より下の坂が武家屋敷、上は寺町であった。

街の発展のきっかけは、江戸の都市計画の一環として、神楽河岸「揚場」が設置されたこと、神楽坂通りが矢来町にあった酒井家屋敷から牛込御門までの登城路として整備されたことだとされている。寛永 13 年、江戸城の外濠として飯田濠がつくられた。その後万治 3 年、幕府は伊達綱宗に神田川の拡張工事を命じ、この際に飯田濠の堀削と神楽河岸の造成も課された。これにより江戸城を防備するための濠が船運用の水路へと役割をかえることになり、神楽河岸は周辺の町屋敷の付属する荷揚場として神楽坂の繁栄の一端を担った。また、徳川家光は「右の手は讃岐(忠勝)で左の手は伊豆(信綱)である」と例えるほど酒井忠勝を信頼しており、牛込御門通りが整備されたのち寛永 14 年 3 月 21 日以降、150 回におよぶ酒井家下屋敷への御成りの記録があるという。

寛政 4 年には善国寺毘沙門天(以下、毘沙門天)が麴町から神楽坂へ移ってきた。この毘沙門天は山手七福神のひとつであり、庶民が参詣に集まるようになったことも繁栄を続ける

理由である。

◆明治時代

明治2年、神楽坂から名前をとって坂の両側が「牛込神楽坂」と名付けられた。神楽坂はもともと善国寺毘沙門の寅の日の縁日、境内の稲荷の丑の日の縁日などで賑わっていたが、明治20年ごろになるとそれとは別に夜店が開かれるようになった。また、日本で初めて警察の許可をとり、「牛馬車止」の標識を坂下と坂上に置いて歩行者天国のようにしていた。

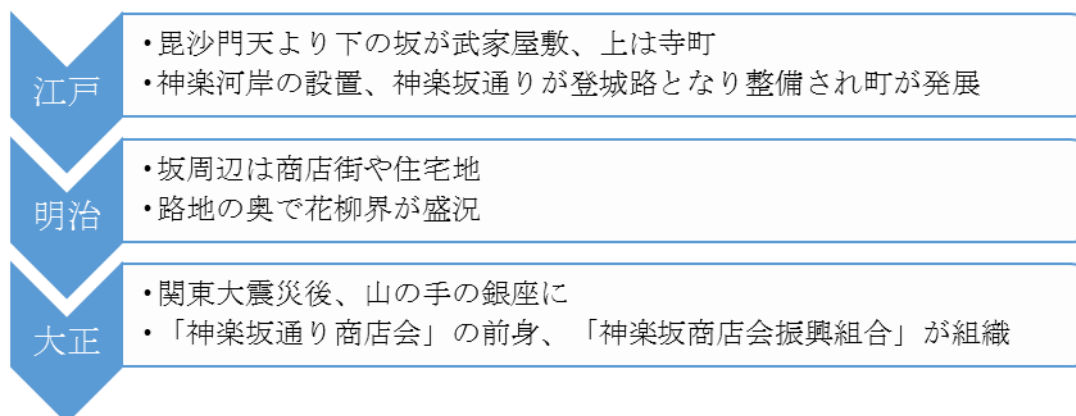
明治27年に甲武鉄道牛込駅が開設し、坂周辺は商店街や住宅地へと変貌していく。明治33年に待合が政府許可となった。神楽坂の待合の始まりは行元寺内で開業した「吾妻屋」であると言われている。この頃になると、武家屋敷はほとんどなくなって町屋一色になり、坂の奥の路地には芸妓屋・待合が盛況した。また、日清戦争以後に芸者置き場・待合・料理屋の花柳界・三業地が形成されるようになる。明治39年には東京物理大学、現在の東京理科大学が開校して早稲田大学の学生もあわせて学生の通学路となり、牛込一の繁華街として賑わうようになった。また、明治中頃から牛込界限には出版社とそれに付属して印刷会社が多く設立され、新宿区の地場産業として認知されている。

◆大正時代～終戦まで

大正元年、飯田橋駅から大久保駅に通じる大久保通りが開通した。大正12年、関東大震災が東京を襲い繁華街の多くは壊滅状態であったが、山の手に位置していた神楽坂は被害が軽く、火災による被害もなかった。そのため三越・高島屋・白木屋といったデパートが通りに店舗を出した。銀座や浅草等の繁華街が復興するまでの間、下町の客を吸収して大勢の人々が神楽坂に集い、山の手銀座と呼ばれるようになっていた。また、震災復興をもとに大正14年に坂が舗装された。坂道の多いサンフランシスコの木煉瓦の舗装を真似たが、雨が多い日本には合わず、すべりやすいとして悪評だった。2年ほどして御影石に筋を入れた舗装に変わり、同時に電気の街灯が設置された。

大正期には、坂下から大久保通りまでの表通りの商店を組織する現在の「神楽坂通り商店会」の前身、「神楽坂商店会振興組合」が組織された。

戦前のピーク時で待合・料亭あわせて120軒以上、芸者は700名以上いたとされるが、昭和18年に戦時下における企業整備で三業地が不要業種に指定され、芸妓たちは飛行機の部品づくりへと動員されることになる。そして昭和19年、警察が待合と芸妓屋を閉鎖したことで神楽坂の花柳界も賑わいをなくしてしまったまま終戦を迎えることになる。



江戸から大正時代までの主な歴史(筆者作成)

2-3 まちづくりのルール

ここでは本論文でも重要なルールとして認識している「神楽坂まちづくり憲章」と「神楽坂三・四・五丁目地区」地区計画を紹介しておく。

2-3-a 「神楽坂まちづくり憲章」

平成3年、商店会・町会・地域住民からなる「神楽坂地区まちづくりの会(以下、まちづくりの会)」が発足。翌年には「神楽坂地区まちづくり推進計画(案)」を区長へ提出。平成6年には「まちづくりの会」が中心となり、「神楽坂まちづくり憲章」を策定した。以下、その内容である。

わたしたち神楽坂地区の住民は、神楽坂の魅力と伝統を生かしつつ、住みつづけることができるように、「伝統と現代がふれあう粋なまちー神楽坂ー」をまちづくりの目標とし、

- ・商業と住宅の共存したまちづくり。
- ・伝統的情緒に彩られたまちづくり。
- ・楽しく散策できるまちづくり。

を基本計画としてまち作りを進めていきます。この基本計画に立ち、ここに神楽坂地区まちづくり憲章」を宣言します。

- 1 坂と石畳のみちを中心に、歩く人にやさしいまちをつくります。
- 2 神楽坂の歴史や伝統を背景に、文化のかおり高いまちをつくります。
- 3 安心して買物のできる、うるおいのある商店街のまちをつくります。
- 4 住むひとが暮らしやすい、やわらかなまちをつくります。
- 5 まちづくり協定をさだめ、未来の神楽坂をつくります。

この憲章の策定が神楽坂のまちづくりのスタートとされている。

2-3-b 「神楽坂三・四・五丁目地区」地区計画

平成9年に導入された任意協定、神楽坂通り沿道・1～5丁目地区まちづくり協定」をベースに開発の抑制が行われていたが、地区計画の具体化を求める住民の要請により平成19年に仮説的な地区計画として成立、平成23年には内容が変更・更新されている。神楽坂界限の歴史に育まれてきた地形と雰囲気を継承し、賑やかで活気あるまちづくりを進めるために作成された。また、この計画は「まちづくり憲章」と平成17年に締結された神楽坂本多横丁の「小粋な横丁づくり協定」の内容を取り入れたものとなっている。地区計画の概要は下記である。

1 住宅と商業施設が調和した街並みの形成を目指します。

神楽坂にふさわしくない店舗型性風俗店や勝馬投票権発行所等の用途の建築物を制限し、良好な市街地の形成を図ります。

【建築物等の用途の制限】

2 道路からの見晴らし空間を確保します。

建築物の高さの最高限度を定め、街並みから突出した高層建築物を制限します。また、外壁のそろった街並みの連続性を誘導します。

【建築物等の高さの最高限度】

3 現在のまちの環境やスケール感をまもります。

神楽坂地区の敷地の細分化を防ぎ、地区の良好な環境を保ち、防災機能の低下を防ぎます。

【建築物の敷地面積の最低限度】

4 神楽坂界限特有の景観を継承していきます。

建築物および工作物の形態、色彩その他の意匠は、地区の景観や周辺環境に配慮するとともに、路地景観を損なうおそれのない、落ち着いたものとしします。

【建築物等の形態又は色彩その他の意匠の制限】

5 本多横丁沿道の歩行者空間の拡充を図り、良好な街並みの形成を目指します。

本多横丁沿道の建築物の壁面後退および工作物の設置の制限により、歩行者空間の拡充を図り、通行しやすいゆとりある道路空間を確保します。さらに、容積率制限や道路斜線制限の緩和を行い、沿道に適した街並みとなるようにします。

【壁面位置の制限】

【壁面後退区域における工作物の設置の制限】

【建築物の容積率の最高限度】

上記のように、建築物に関して制限がある。具体的には、神楽坂通り又は軽子坂を

前面とする建物の高さの最高限度は 31m、それ以外を 21m、敷地面積は 65 m²以上等の規制がされている。また、本多横丁に対しては歩行者空間の拡充を、路地景観の継承に関しても重きを置いていることがこの地区計画の特徴である。

2-4 神楽坂の路地空間

ここでは、先行研究をもとに神楽坂の路地空間を整理する。西村(2006,pp67~73)の中で、NPO 粋なまちづくり倶楽部・山下馨氏が神楽坂の路地を 3 つに類型化している。

1 つ目は、花街が創り育てた「しつらえともてなしの路地」である。俗称、兵庫横丁、かくれんぼ横丁がこの代表で、熱海湯横丁もこの仲間とされている。「しつらえともてなしの路地」は、ピンコロや石版の舗装に黒板塀や築地塀などで囲んである空間である。また、最も神楽坂が大切にしていけるべき路地空間だと述べられている。そこには料亭や割烹などが並び、歩行者のための空間であるとともに、夜は接客空間としても利用されている。この独特の雰囲気から一軒の客は足を踏み入れづらい空間でもある。一歩足を踏み入るとこの空間は人に作法を要求し、私たちは静かにしなければならないのだと理解して自然とマナーを守るようになる不思議な空間である。地区計画ができて



からは、「しつらえともてなしの路地」は伝統的路地空間として呼ばれることもある。

「しつらえともてなしの路地」熱海湯階段(筆者撮影)

2 つ目は、飲食店、物販店、娯楽店が連なる「にぎわいの路地」である。神楽小路、

本多横丁、小栗横丁などがこの類型に挙げられている。店同士が個性を競い合っている賑やかな空間となっている。格式張ることはないが、神楽坂の全体的な雰囲気や壊すことなく存在し、粋な町並みを構成している。

3つ目は、住居が連なる「生活系の路地」である。花街の一部や白銀町、神楽坂六丁目、若宮町、横寺町、矢来町・赤城町境界が挙げられている。この境界には住宅が多く、生活路地が多く存在しているが、どこか神楽坂との繋がりを感じさせる住民たちの路地に対する配慮がみられるという。

神楽坂の路地は以上のように3つに類型化できるが、それぞれが独立しているのではなく、重なるように連続して存在している。本論文で着目している路地空間は花街から発展した「しつらえともてなしの路地」である。

3章 神楽坂の記憶 ～3つの敗北～

3-1 まちの形が残った戦後の復興

神楽坂は東京大空襲で一面火の海になり、江戸時代の都市づくり以来約 340 年も続いたまちの姿がなくなった。戦後すぐの米軍領下、軍宿舎が中野方面にあったので神楽坂通りは都心と宿舎を結ぶ指定軍用道路となった。そのため、まちの賑わいを保ってきた夜店がしばらく禁止されることになる。

まもなくして花柳界から戦後の復興が始まる。商店街にもバラック建ての店が出来始めていたが、飯田濠を一部埋め立て神楽坂警察署ができて監視されていたため、闇物資は出回らなかったという。そのため、新宿や池袋など闇市からいち早く復興した地域に比べてまちの復興・発展は遅れを取るようになる。

また、この頃から商店会も息を取り戻そうと動き出す。神楽坂振興会長が中心となり、軍用道路の撤回や神楽坂一から六丁目の町名統合、車通行止め、夜店の復活等を役所に請願した。そして、昭和 26 年に神楽坂坂下から赤城神社の入口までが統一された町名になり、昭和 33 年には戦後初めて縁日が復活した。この頃、まちの表立った動きを先導していたのは商店会をまとめる神楽坂振興会であるとわかる。昭和 38 年頃からまちでは一方通行と歩道をつくる運動を始めて、その後神楽坂通りは午前に坂を下り、正午は歩行者天国のランチタイム、午後は坂を上る。また、日曜・祭日は正午～午後 8 時まで歩行者天国という全国でもまれに見る逆転式一方通行となった。しかし、この決定は商店会と町会にはなんの相談もなく警察署から通達されたものであったという。

その一方、花柳界は戦後の景気回復に伴い、戦前と同じような活気を取り戻していた。その追い風となったのは昭和 27 年、神楽坂はん子『ゲイシャ・ワルツ³』の大ヒットであった。東京神楽坂組合理事長は、「その頃から三十九年のオリンピックまでが一番賑やかだった」と講演で語っている。神楽坂の花柳界はその名を全国に広めることになり、地域の繁栄に寄与していたと考えられる。しかし、その花柳界も時代の流れとともに衰退していくことになる。

昭和 43 年、商店会の名称が「神楽坂振興会」から「神楽坂通り商店会」となり、坂下から坂上までが中心の商店会へと変わった。昭和 47 年からは「神楽坂通り商店会」が中心となり、「神楽坂まつり」が行われるようになった。前半は夜店や縁日の雰囲気を行々させる「ほおづき市」で毘沙門天の周辺に露店が出店する。後半はその当時、賑わいをみせていた高円寺の阿波踊りを参考に「阿波踊り大会」を開催するようになった。花柳界が衰退の一途を辿る一方で、神楽坂の商店会がまちを盛り上げようと動き始めた証である。

現在、神楽坂には古い街並みや戦前の建物が残っているわけではない。そこに江戸の情緒を感じることができるのは、江戸時代の武家屋敷から発展して形成されたまちの骨格が変

³神楽坂はん子という芸者が作曲家・古賀政男に認められて歌手デビュー。その彼女が歌う『ゲイシャ・ワルツ』(作詞・西条八十)が大ヒットとなった。

わからない形で残されて復興を遂げたからであると考えている。その骨格が残ったのは、復興の際に外の開発の手が入らなかったことに加え、花柳界から復興が始まったこと、戦前の形に戻そうと奮闘した商店主たちがいたからである。まちの街区に植えつけられている歴史の記憶は現在でも神楽坂に生きる人々の誇りとなっており、それを壊そうとする再開発からまちを守るために若い戦士たちが立ち上がり奮闘するのである。

3-2 若手が立ち上がった反対運動 —第1の敗北—

◆飯田濠再開発の経緯

戦後の復興から「神楽坂まつり」の開催へとまちが元気を取り戻しつつある一方で、神楽坂の入り口とも言える飯田濠付近では、濠の埋め立てを前提とした再開発計画が昭和47年に決定されていた。これは戦後の高度経済成長とともに飯田濠の汚濁・悪臭問題が社会問題となっていたことが大きな理由である。この計画は「飯田濠再開発」として飯田橋・神楽坂地区全体に波紋を広げる大きな問題となった。

地権者による権利変換処分をめぐる訴訟問題が起きていたことをきっかけに、「飯田濠を守る会」が結成されて反対運動が起きることになった。神楽坂通り商店会では組織としては表明しなかったが、商店の2代目・3代目といった若い世代が立ち上がって青年会を結成して、反対運動に加わったという。また、再開発に対して地域は反対一枚岩であったこともこの反対運動の特徴である。反対派の主張は2つであった。1つは、江戸時代から続く歴史景観の保護、もう1つは、治水対策としての遊水地機能の維持であった。治水対策に関しては、埋め立て工事と合わせて排水路を開設することで解決したようだが、今でこそ見直されている歴史景観の保護は成されることなく、昭和48年に埋め立てられてしまった。また、飯田濠の再開発と連動して揚場町の再開発も行われることになっていた。これには地元の材木店が中心となり、それを応援する形で神楽坂通り商店会の青年会も協力したという。しかし、行政代執行が決定されてしまった。当時は成田の三里塚闘争⁴がニュースで取り上げられたこともあり、死傷者を出すわけにはいかないと突入を断念した。そして、建設は実行に移されることになった。その後、再開発に対する反対運動は行われていたが、昭和61年に飯田橋セントラルプラザ「ラムラ」が完成した。飯田濠再開発を許してしまったことで周辺の景観が変わり、飯田橋駅周辺はオフィス街の色を濃くしていく。

◆敗北を経験した若手層

神楽坂の入り口である飯田濠や揚場町の再開発は、反対運動を行ってきた商店主たち、まちの人々にとって初めての敗北の記憶として受け継がれることになる。今後の神楽坂のまちづくりに与えた影響は大きいと考える。その理由は、反対運動を積極的に行ったのが、商店の2代目・3代目にあたる若手が集結した青年会であった点である。当時、青年会として

⁴ 成田空港建設に反対する闘争。社会問題化して大きく報道された。

活動した人々は、その後から現在まで「神楽坂通り商店会」、「神楽坂まちづくりの会」、「NPO 法人粋なまちづくり倶楽部」の中心人物として神楽坂のまちづくりに関わっている。戦後、まちに復興に力を注いでいた店主たちの背中をみて育った息子たちが、後に神楽坂のまちづくりを先導するリーダー集団となったのだ。神楽坂の店主たちは、飯田濠再開発への反対運動を通して、最も困難である「まちを守る精神」の継承に成功したと言えるだろう。そして、彼らが「行政へは任せておけない」という教訓を得て、「自分たちが神楽坂を守るのだ」と決意した原体験が飯田濠再開発計画に対する反対運動の敗北であったのだ。

3-3 「粋な」まちづくりのスタート —第2の敗北—

◆花柳界の衰退と危機感

飯田濠再開発への反対運動の裏で、昭和 30 年代をピークに力を弱めていた花柳界は高度経済成長期、そしてバブル期の終焉とともに衰退の一途をたどっていた。また、女将・主人たちの高齢化や相続問題、後継者難や経営難等も重なって老舗の料亭が続々と閉店し、その跡地にはチェーン店やマンションができた。その中に戦後の建物があちこち挟まっているといったちぐはぐで雑多な状態にまちが変化していた。

神楽坂の路地空間を利用し、その景観やまちの繁栄を影で支えてきたのは花柳界である。平成 16 年に実施された「神楽坂まちづくりの会」のアンケート⁵では以下のような意見が目立った。

「通り商店会だけでは町は成り立たない。表側と裏側が一体となっこそ、町は生きてくる。人は通り商店会の魅力だけで集まっているのではなく、裏側の路地の花柳界の神秘的な風情や町全体がもっている歴史性みたいなものに惹かれて、人は集まっている。商店会はそのことを忘れてはいけない」

「神楽坂は花柳界で食べてきたことは事実だ。神楽坂の情緒は花柳界が担って来たのだし、そこが落ち目になったからといって見捨てたりしてはダメだ」

このように店主たちも花柳界あつての神楽坂であるという理解を示していることが読み取れる。その中で花柳界の衰退が直接的に神楽坂の衰退に関わってくるという危機感もあったのだろう。飯田濠再開発に続き、まちの情景の変化に不安を感じるようになった店主や地域住民は、自然とまちの将来を考えるようになったという。

◆自主的なまちづくりの始まり

そんな中で転機が訪れる。昭和 63 年 10 月、新宿区が「新宿都市整備方針」を策定し、

⁵ NPO 粋なまちづくり倶楽部元理事 T 氏が実施したアンケート調査より

その方針の中で「神楽坂・飯田橋地区」は「まちづくり推進地区」に位置づけられた。そして、平成3年7月19日、神楽坂地区の「まちづくり推進計画」を検討するための組織として「神楽坂地区まちづくりの会」(現在は「神楽坂まちづくりの会」)が発足した。メンバーは55人で商店会・町会・地元住民にプラスして専門家や学生も含まれていたようだ。この組織は、神楽坂の将来を検討して、一年後にまちづくりの目標として「伝統と現代がふれあう粋なまち神楽坂」を定め、新宿区に提出することでその役割を終えた。ここで示された「粋」というコンセプトは現在まで引き継がれる神楽坂の精神となっている。行政主導で組織された会であったが、せつかく集まった会だからと自主的に活動を継続することになった。その第一歩として、地元住民のアイデアを取り入れながら「神楽坂楽楽散歩」というマップを作成した。その活動を経て得たまちの声をもとに、平成6年「まちづくり憲章」を策定した。そして、その集大成として平成9年に『まちづくりキーワード集』で様々な人々の神楽坂のまちに対する思いをまとめた。また、平成6年7月、神楽坂の文化的側面に着目し、タウン誌「ここは牛込、神楽坂」が創刊した。このタウン誌は最終号の平成13年まで地元の文化を積極的に伝えるメディアとして機能し、地元住民に愛されていた。

このような自主的なまちづくりの活動が評価され、街並み環境整備事業の導入が図られることになった。また、それに伴う「まちづくり協定」の案が作成されており、あとはまちの合意を得るだけというところまでたどり着いていた。しかし、その状況に水を差すかのように、神楽坂3丁目の一角、通称マーサ美容院跡地にビルが立つ計画が浮上した。

◆第2の敗北から「まちづくり協定」へ

この「神楽坂3丁目ビル計画」は、まちづくりのルールを整えることの重要性を認識させた出来事となる。計画ができた当時に作成されていた「まちづくり協定」の案では、神楽坂通りに面した建物は高さ18m、階数にすると6階までという規定を設けることになっていた。しかし、神楽坂3丁目ビル事業者の計画では10階建てであった。危機感を持った神楽坂3丁目町会が主体となって連絡協議会が設立されて交渉が始まった。協議会と事業者側の直接交渉の後でも決着が付かず、平成8年5月に協議会は「紛争調整申出書」を東京都に提出した。その後、都の立ち会いのもと話し合いが行われ、その中で階高を1階削るという譲歩案が示されたが、協議会は「ここで譲ってしまうと新たな開発を助長してしまう」と諦めず、調停への移行となった。最終的には平成8年8月、双方の合意をもって調停は終了した。現在はヴァンテ・アン神楽坂というビルが建設されており、6階以上の高さがあることから、協議会側が最終的に妥協した形になったようだ。1階にコンビニ、2階にロイヤルホストが入っており、1階のコンビニの正面は他の建物よりも数メートル後退している。このことで神楽坂が保ってきた外壁の揃ったまちの連続性を欠くことにもなってしまった。

この神楽坂3丁目ビル計画の敗北から商店会と地元住民は「まちづくり協定」というルールを作りこむの必要性を再認識したという。そして、平成9年7月、「街並み環境整備事業」の導入が決まり、同年9月には神楽坂通り沿道の神楽坂1から5丁目地域で「まちづ

くり協定」を締結した。この協定は後の地区計画策定へと繋がってくる。行政主導ではない自主的な活動が始まり、「まちづくり協定」締結まで漕ぎ着けたこの時代が神楽坂のまちづくりのスタートだと考えられる。

3-4 超高層マンション出現と路地の喪失 —第3の敗北—

◆超高層マンションの建設の経緯

平成12年4月、31階建て高層マンション計画が事業者から近隣住民に説明された。この超高層マンション計画をめぐる議論は、「寺内跡地開発紛争」と呼ばれており、神楽坂のまちづくりにおいて最大の影響を与えたものである。

バブル経済崩壊後、地上げを許してしまったこの土地には、東京理科大学の施設を建てる計画が一番初めに挙がっていたという。計画としては15階建てくらいであったが、学生の街としても繁栄してきた歴史がある神楽坂の地元住民には、理科大学の学生が来るならば少し高くても許そうかという雰囲気があった。しかし、いつの間にか理科大学の計画がなくなり、代わりに区道を付け替えて超高層マンションをつくろうという計画ができていた。

この計画を説明会で初めて知った近隣住民は署名活動を開始した。約4360名の署名をもとに、「事業者との話し合いがつくまで区道の付け替えを保留に」という陳情を行い、区議会で可決された。しかし、話し合いは平行線で住民の訴えにも関わらず、事業者は戸別訪問を止めなかったという。そして、近隣住民懇談会において「神楽坂高層マンション対策協議会」が発足され、本格的な反対活動に発展していく。その後、計6082名の署名をもとに「新宿区の管理者としての廃止の同意」を区長に求め、「区道の廃道の公示」を待つほしいと陳情したが、区議会の前に行われる環境建設委員会で継続審議となった。さらに、協議会は区長あてに「計画の抜本的な変更の指導」と開発行為の同意と区道の廃道の公示のさらなる留保」を陳情した。また、建設計画をゼロに戻すことはできないとわかった協議会は、事業者側の採算性にも配慮し、街並み景観にあった建設計画は考えられないかという問題提起を行った。これに協力したのが、東京大学都市デザイン研究室の院生であった。平成12年10月中旬に3つの対案の展示会を実施し、これが区議会にも持ち込まれた。同年11月下旬には「事業者が神楽坂のまちづくりの文脈に沿って建設計画を抜本的に変更されますように要望いたします」といった3回目の陳情を行い、区議会で採択された。結果、事業者側は当初の計画から5階削り、26階建てに変更することを決めた。このことは「まちづくり憲章」の作成や「まちづくり協定」の締結など自主的なまちづくり活動が評価されたことと、外部組織との連携によりマンションの代替案を提出して事業者側へ歩み寄った成果でもある。しかし、その間に「開発行為の事前協議会の同意」と「区道の廃止と認定の公示」が出されており、協議会は区道の廃止の取り消しを求めて東京地裁に提訴した。これは平成13年2月から平成15年4月まで法廷論争を行い、最高裁まで争ったが全敗という結果に終わった。事業者側には、階数を減らしたから許してくれという思いがあったのかもしれない。

また、神楽坂に住みたいという人がいるにも関わらず、住める物件がないといった現状もマンション建設を後押ししたと考えられる。

◆路地の喪失

寺内跡地は、鎌倉時代の末から「行元寺」という寺が置かれていた。江戸時代の中期には武家の住まいとして貸し出され、この中に貸地通行道(のちの区道)という細い路地があった。この路地をもつ場所から神楽坂の花柳界が発祥したと伝えられている。そして、明治40年の区画整理の際、行元寺が品川区西五反田に移転し、その跡地を「寺内」と呼ぶようになったという。夏目漱石の『硝子戸の中』には従兄の住む寺内でよく遊んでいた思い出が出てくる。また、俳優・勝新太郎や『ゲイシャ・ワルツ』で神楽坂の花柳界を全国に広めた芸者・神楽坂はん子も寺内に住んでいたそう。寺内が繁栄していた当時を知る人は次のように語っている。

「小道がたくさんあって、今のように離れていなくて、路地がずっと繋がっていました。そこは自転車も来ないので、子供にとってはいい遊び場でした⁶⁾

「寺内」といわれた、いまのインスタワーという大きなマンションの脇にあった行元寺の門前に花柳界ができたのが始まりです。あの辺が一番賑やかだったんですね⁷⁾

江戸中期から残されていたこの路地は、昼間は人々が往来する子供の安全な遊び場として機能し、夜には花柳界の賑わいを見せる場所であったと考えられる。しかし、この区道を含む寺内はバブル経済崩壊後の地上げで商店や住宅がなくなり、24時間営業の駐車場に姿を変えた。そして、その区道の利用者はほとんどいなくなっていた。歴史的にも重要な土地であったが、利用者のいない区道が通ったこの土地に再開発の手が忍び寄るのは時間の問題であった。今となっては「地上げを許していなければ」と悔やむ声も聞こえる。

現在、高層マンション(神楽坂インスタワー)の隣には付け替えとなった区道を寄せあつめた面積で公園が作られており、その名前を「寺内公園」と名付けた。マンションが建設された場所である「寺内」の名を残すためである。公園ができた所以を知らない人がみると、ただの休憩所のように見えるが、まちの人々にとっては紛争の記憶を残す場所となっているのだ。

⁶⁾ 『まちの思い出をたどって』第1集 聴き取り調査①「神楽坂 京屋」水野正雄さんのインタビュー(pp3~23)より引用

⁷⁾ 『まちの思い出をたどって』第1集 東京神楽坂組合理事長 渋谷信一郎さん(料亭「千月」主人) NHK 学園オープンスクール講座「粋まち散策」～神楽坂界限～ 講演内容の記録より引

◆3度目の敗北で得たもの

この紛争で注目すべきところは3つある。まずは、地元住民や商店会が路地のもつ価値を認識した点である。飯田濠再開発や神楽坂3丁目ビル建設の際、景観に対する話は出てきたが、路地の保全に関する議論は表立って出てくることがなかった。「まちづくり協定」の中でも街並み景観の連続性を保つために壁面を揃えること、建物の高さを制限したり、看板や意匠等に工夫を凝らすように指示をしたりすることは述べられているものの、路地空間の維持に関することは触れられていない。高層マンションが出来上がってみて、江戸の雰囲気を残す路地でふと顔を上げるとそこには高層マンションが出現し、江戸と現代の開発が混在している異様な空間と対峙することになる。



路地から見える高層マンションの様子
(筆者撮影)

その後、伝統的な路地空間をこれ以上壊すことがないようにと、全国路地サミットの開催やまちあるきでの路地の紹介など神楽坂の路地の魅力を伝える活動が行われるようになる。

また、現在の地区計画をみると、伝統的な路地が残る地域だけでなく、その周辺の広い範囲が対象となっていることから路地から望める景観含めて保全していく必要があると認識した出来事だったのだろうと推測できる。

2点目は、まちが反対派と賛成派で2つに割れてしまった点である。大規模な反対運動が行われた飯田濠再開発では歴史的景観を守ろうという意識が強くほとんどが反対し、一枚岩のような状態であった。しかし、今回は高層マンションができることで約2500人のまちに500人以上の住民が増えることになり、商店を利用してくれるのではないかという期待から賛成する商店主も少なくなかった。また、「神楽坂地区まちづくりの会」の中でもやはり反対派と賛成派にわかれ、意見が衝突していたようだ。反対派はこのままではまちの景観が壊れて価値がなくなると専門家も加えて主張を続けたが、まちを一つにまとめることには至らなかった。商店にとっては自分の商店の経営を何よりも優先することは当たり前で、まちづくりはその次だという考えがあり、まちの景観について理論的に語っても理解されない部分があったと考えられる。高層マンションの建設が進む中、2つに割れてしまったまちを元に戻そうと、反対派と賛成派、そして新しい住民も含めてまちづくりを考えるきっかけになればと「第1回神楽坂青空マップ展」が開催された。この長い紛争は、行政や事業者との戦いだけでなく、まちの住民同士の対立も生まれて神楽坂のまちが揺れ動いた。しかし、期待されていた新しい住民のほとんどは、神楽坂の商店、特に老舗と呼ばれる店をほとんど利用していないようで、住民が増えたことが直接的に神楽坂の経済を好転させたとは言えない。また、マンションに越してきた人でまちづくりの活動にも積極的に参加する住民は数名であるようだ。このことから、紛争では苦しみ争っても何もメリットがないということを学んだという。

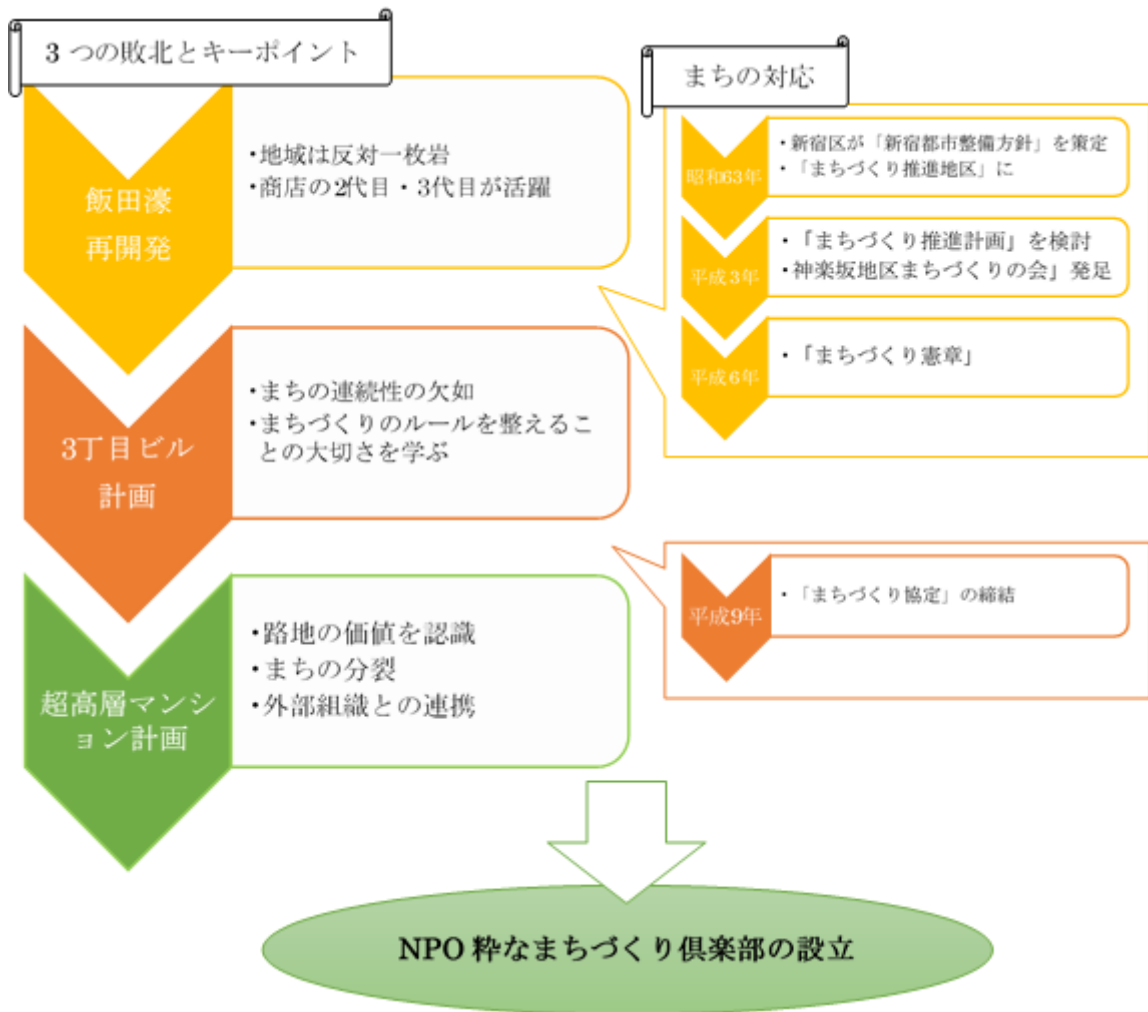
3点目は、外部組織と連携して反対運動を行った点である。前述した東京大学都市デザイン研究所の教授と院生だけでなく、神楽坂に事務所を構える都市計画の専門家や建築家、弁護士などが協力した。住民・商店会の活動にプラスして、専門家の手助けがあつての31階建てから26階建てへの変更だったと考えている。しかし、結局は26階建てマンションの建設を止めることができなかったという敗戦の悔いが住民や商店会だけでなく、反対運動に協力した専門家たちの間にも植えつけられた。このことがのちにNPO法人の設立に繋がりと、高層マンションの紛争で戦った専門家たちが現在まで神楽坂のまちづくりに関わり続けている結果に現れている。

4章 神楽坂のまちづくり ～路地を守る～

4-1 まちをまとめる組織の誕生

◆3つの敗北からのNPO設立

戦いの終わりを告げる高層マンションが完成し、新しい住民の入居が始まった平成15年、地元発の「NPO 粋なまちづくり倶楽部」(以下「NPO 粋まち」とする)が設立された。



3つの敗北の流れとまちの対応(筆者作成)

飯田濠再開発への反対運動で立ち上がった若手リーダー層が超高層マンション建設まで3つの敗北を経験し、任意団体では対応の難しい契約行為を伴うようなまちづくり関連事業をより強力に押し進めていく必要性を実感した。そして、彼らが建築・都市計画の専門家がタッグを組み、設立されたのがNPO 粋まちである。法人化してからは、伝統芸能入門・花柳界入門・黒塀プロジェクト・まちあるきガイド・ゆかたでコンシェルジュ等の開

催の他、高齢社会対策事業や出版活動を行っている。また、近年では神楽坂に対する正確な知識を後世に伝えるためにと「神楽坂検定」を作成・実施している。

◆花柳界との連携

特に着目したい活動は、花柳界との連携である。平成 17 年 5 月に着物でまちを案内する「着物でコンシェルジュ」の一環として芸者衆のトークショーを実施したのが始まりだ。粋なまちの根底にある江戸を感じさせる雰囲気を支えてきた花柳界の文化を一般の人にも知ってもらおうと、トークショーやお座敷ゲームの体験などを行っている。NPO 粋まちは、東京神楽坂組合に願い出て、芸者達にも直接、協力を依頼しにいったそうだ。その後、同年 11 月に「まち飛びフェスタ」のイベントで「花柳界入門講座」を開催した。チケットは即完売し、当日も大盛況だったという。また、現在でもまちのイベントと連動して「花柳界入門講座」が開催されているが、毎回チケットが入手困難な大人気イベントになっている。「芸者の仕事は料亭の中で外に出るものではない」という考え方が強い花柳界がまちのイベントに協力した例は神楽坂がはじめてで、異例な連携である。

このように NPO 粋まちは裏舞台にこもっていた花柳界を表舞台に立たせることで、花柳界文化の価値を神楽坂の人々、そして芸者たち自身にも再認識させた。初めは乗り気でなかった芸者たちも「花柳界入門講座」の盛況を受けて自分たちの文化が注目されていることを嬉しく思い、継続的にイベントを続けているそうだ。インタビューを実施した際、NPO 粋まちは元理事・T 氏はこの様子を「花柳界の『花』を『華』に変えた」と語っていた。神楽坂の表と裏として分離していた商店会と花柳界の両方をまちづくりの構成員として取り込むことに成功したのである。

◆地域外人材をボランティアとして呼び込む

また、NPO 粋まちはボランティアとして地域住民はもちろん、神楽坂で働いている人や神楽坂ファン、学生等を取り込み、まちづくりに協力してもらうことに成功している。月に 1 度、ボランティア説明会兼まちあるきを実施している。筆者が参加した説明会には約 20 人が参加しており、少ない月でも 3 人程度は参加者がいるという。現在は 20 代から 80 代まで幅広い年齢層で約 300 人がボランティアに登録している。まちのイベント運営だけでなく、通訳として関わったり、出版物の作成に関わったりと自分の仕事や得意分野に応じてボランティアに参加できる。このように神楽坂地区に関わりのある人々だけでなく、神楽坂に興味・関心のある積極的な人材をまちづくりに活かすことでサポーターの範囲を拡大させている。筆者は、10 月 16 日に行われた NPO 粋まちはの内部組織である UDDB⁸の企画「坂カフェ&まちあるき」と 10 月 30 日に NPO 粋まちは主催で行われた「神楽坂震災復興支援サロン 2016」へボランティアとして参加した。「坂カフェ&まちある

⁸ まちあるきを全てのひとに楽しんでもらうために必要な 4 要素「ユニバーサル・デザイン・ベンチ・便所」の略であり、バリアフリーなまち神楽坂を目指して活動している。

き」は、車椅子に乗ったり、高齢者体験キットを身につけたりして歩行者天国となったまちに繰り出して、神楽坂をバリアフリーなまちにするにはどうすればよいかを考えようという企画である。杉並区の障害者・高齢者支援を行っている NPO 法人が協力団体として運営に参加していた。実際に車椅子に乗ってまちあるきを体験した人の声には、「坂の移動は非常に大変」「かくれんぼ横丁等の路地はガタガタして進みづらい」等の声もあったが、「路地はガタガタしていたが、それも神楽坂らしい。無理に平にしなくても観光なら楽しめる」という意見もあり、新たな路地の魅力を発見することができた。「神楽坂震災復興支援サロン」は、神楽坂のまちづくり関わっている都市計画や建築の専門家たちが東日本大震災の復興にも関わっていることから、神楽坂で何ができるのか考えてみようという企画である。まちづくりの専門家から実際に被害に遭われた方、大学院生などが震災復興の現状をシェアし、今後やっていくべきことについて話し合っていた。ふらっと立ち寄り、展示されたパネルやゲストの話聞く地域住民もいた。現段階では、自分たちに何ができるかを考えるサロンであるが、今後は神楽坂の事前復興について考える場に繋がっていくのだろうと思う。

◆「扇の要」としてのNPO 粹まち

NPO 粹まち設立の流れを受けて、平成 16 年には「神楽坂まちづくり興隆会」が設立された。構成メンバーは町会・商店会・各種団体等の代表者であり、神楽坂通り商店会が事務局を担当する事となった。このように NPO 粹まちができたことが作用し、地域内の組織を集約させた。また、外とのネットワークを広げてまちづくりへと繋げる「扇の要」のような存在であり、神楽坂のまちづくりを進めていく上で重要な役割を担っていくことになる。



神楽坂のまちづくり連携イメージ図(筆者作成)

4-2 まちを盛り上げる装置の多様化

NPO 粹まちが設立したことに加え、まちを盛り上げる装置としてのイベントが多様化していく。そして、それらが与えるまちへの影響は多岐に渡り、神楽坂まちづくりの構成要素としてなくてはならない存在になっている。ここでは、それらが持っている効果を考察し、まちづくりに対してどのように働きかけているかを整理しておく。

4-2-a 地域内外のネットワークを構築するイベント

平成 11 年 7 月 4 日に産声を上げた「まちに飛び出した美術館」(のちの「まち飛びフェスタ」)は、まち全体をアールスペースにするという企画である。タウン誌『ここは牛込、神楽坂』を発行していた牛込倶楽部と地元のギャラリーが共催で始めたイベントだ。2 回目以降は名前を「まち飛びフェスタ」に変更、主催はまち飛びフェスタ実行委員会になり、ボランティアによって組織されている。まち全体をアールスペースにするという言葉通りに神楽坂通りや路地はもちろん、ギャラリーや商店、飲食店や銀行等も含め、神楽坂地域全体が舞台となるまちの文化祭となっている。その内容は、伝統芸能から現代アート、展示やモノづくり体験など様々。平成 28 年度の「まち飛びフェスタ」は 10 月 15 日から 11 月 3 日まで開催され、約 70 もの企画が行われていた。

中でも注目したい企画は、「化け猫パレード⁹」、「ギャルソンレース」、「坂でお絵かき」の 3 つである。歩行者天国となった神楽坂通りを進む「化け猫パレード」は、猫をモチーフにした仮装をしていれば誰でも参加できる神楽坂版ハロウィーンである。この企画の特徴として挙げられるのは、10~20 代くらいの若者、又は小さい子供を連れた家族が多いことである。神楽坂に対しての興味がなくとも気軽に参加できる企画となっていることがわかる。また、猫の仮装をした人々が飲食店や商店であちこち見かけられたことから、商店街の活性化にも寄与しているといえる。「ギャルソンレース」は、パリが本家本元のウエイターレースで、神楽坂通り 100m の上り坂をトレイにのせたグラスの水をこぼさずに運べた速さを競うものである。地域の飲食店を巻き込んだイベントができないかと飲食店経営者が声を挙げて始まった。神楽坂には日仏学院があるためフランス人が多く住んでおり、フランス料理店も多く存在する。また、路地のある風景がパリの風景と似ていると言われていることから、神楽坂は「東京のプチ・パリ」と呼ばれている。誰でも参加できるレースであるが、参加者の服装をみると飲食店の名前が入ったエプロンや割烹着を着ている人が多く、現在でも飲食店がまちのイベントを盛り上げる一員となる場をつくる企画となっているといえる。「坂にお絵かき」は、平成 11 年から始まり現在まで毎行われている「まち飛びフェスタ」のメインイベントである。神楽坂の坂上から坂下まで約 700m にわたる神楽坂通りにロール紙を敷き、そこに思い思いの絵を描いていく。祝祭日に歩行者天国になり、積極的に参加するボランティアスタッフの数が多し神楽坂だからこそ行える企画である。

「まち飛びフェスタ」はまちの文化祭として、地域住民だけでなく新しくできた飲食店や神楽坂ファン、神楽坂にゆかりのない人でも気軽に参加できるイベントが散りば

⁹ 「化け猫フェスティバル」の一企画。神楽坂でよく猫を見かけることやゆかりの文豪である夏目漱石の『吾輩は、猫である』にちなんで、平成 22 年から始まった。

められており、より多くの人々を地域に巻き込む装置となっているといえる。

また、地域内の新規店舗のネットワークを作る企画「ヨコロジー」が平成21年6月に開催された。路地歩きをしているうちに世界各国の文化や物産に触れられるというイベントであり、路地から路地へと横に繋がる様子を「ヨコロジー」という名前に表したという。このイベントの特徴は、比較的若い30~40代のオーナーが集って行っている点である。自主参加した16店舗すべてが開業8年未満と従来の商店街とも違う新しい店舗同士のネットワークが形成された。また、扱うサービスや商品もオリジナリティ溢れたものが多く、その個性や商品がもつ物語性に惹かれて買いに集まるお客さんが多いという。路地裏にある雑貨店、カフェ、ギャラリーで構成され、散歩しながら路地裏のお店を回ってもらうことを目的としている。これはまちづくりの文脈で始まった企画ではないが、神楽坂の路地を舞台に始まった新しい商店ネットワークを築くイベントとして認められ、その後も毎年継続することとなった。

4-2-b 路地の魅力を普及するイベント

路地の魅力を伝える企画として「ゆかたでコンシェルジュ¹⁰」に着目したい。これは「神楽坂まつり」を盛り上げようとNPO粋まちが企画した「ほおづき市」で開催されるまち案内の企画である。所要時間は60分程度で、コースは毘沙門天からスタートする。大手門通りを進み小栗横丁へと向かい、神楽坂通りを横断して芸者新道へ入る。そして、神楽坂仲通りへ出て、かくれんぼ横丁を通り、本多横丁から軽子坂へ出て兵庫横丁へ向かって寺内公園へ着くとゴールである。このように名称が付けられている伝統的路地のほとんどを通るルートになっている。また、案内人は神楽坂で育った語り部の方やNPO粋まちの理事たちであり、場所の説明に加えて歴史やおすすめの店、神楽坂のまちづくりについて等もすることができる。筆者が参加した時には、高層マンション建設の紛争や大久保通り拡張計画等にも触れていて、路地の魅力を伝えるだけでなく、景観を守ることの必要性を理解してもらうこともまちあるきの目的であるのだろうと考えられる。

また、平成17年10月、第3回「全国路地サミット¹¹」が神楽坂で開催された。神楽坂で行われた第3回のテーマは「もてなしの路地、しつらえの路地」であった。サミットに先がけて、午前中に神楽坂の路地歩きが開催され、それをもとに講演やパネルディスカッションが行われた。神楽坂の路地についてはNPO粋まちの理事であった寺田弘氏が報告した。その他に、銀座や金沢の路地についても報告があり、都市における路地の重要性を再認識する機会となった。また、それを神楽坂で開催することができたのは、専門家集団が理事として所属しているNPO粋まちができたからであ

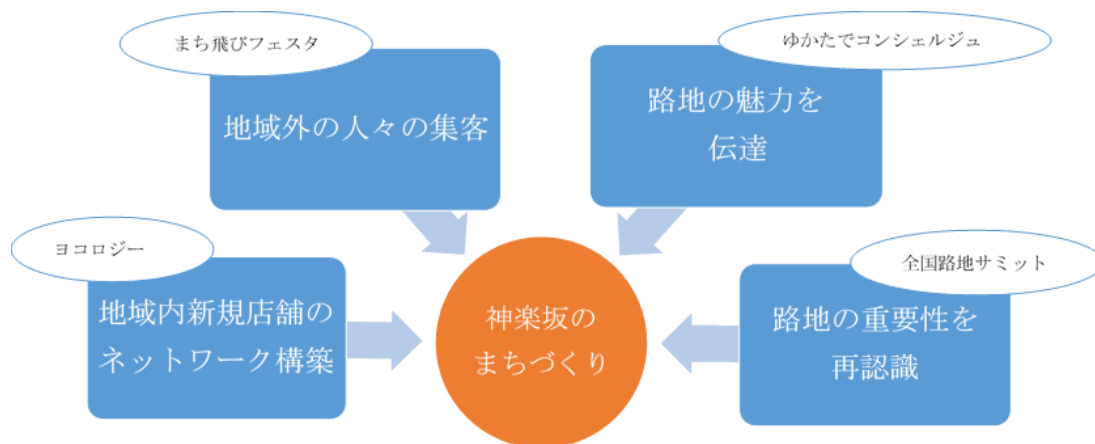
¹⁰浴衣姿のガイドによるまち案内だけではなく、希望者には浴衣の着付けと写真撮影のサービスがある。また、参加者には神楽坂の見所や歴史、路地の由来などが記載されているマップが配布される。

¹¹「全国路地サミット」は、平成15年の東京十条をかわきりに始まった。年に1度、全国の路地のまちづくりをしている人たちが集まり、活動の報告、課題の議論など情報交換を行っている。

るといえよう。

この1ヶ月後、11月15日には3丁目の本多横丁で「小粋な横丁づくり協定」が締結された。この協定の直後から道路の美装工事が始まった。この協定は平成9年に締結された「まちづくり協定」と大きく異なる点がある。それは、道路から壁面を後退させ、6mの幅を確保すると加えられている点である。細い路地が多く存在する3・4丁目付近の防災性を向上させるために、東西を結ぶ骨格となる道路として本多横丁を整備することになった。本多横丁という名前は、江戸時代この場所に本多馬守という旗本の屋敷があったことから名付けられた。その後、明治期に町屋となった敷地内に路地が通り、料亭や芸妓置き場ができた。そのため、本多横丁の両側は、かくれんぼ横丁や芸者新道等の伝統的路地の出入り口となっている。神楽坂通りから伝統的路地へと進む接続の役割を果たすために、建物の高さや意匠、広告等などの制限を設けている。また、横丁の道路も石畳となっており、路地との連続性を感じさせる工夫がされている。

以上に述べてきたようにまちの賑わいをもたらすイベントが立て続けに企画・誘致されてきたことがわかる。またそれぞれのイベントによってまちに与える効果が多方面にあることがわかる。



各イベントの効果のまとめ図(筆者作成)

このようなイベントが開催できるのは、NPO 粋まちという受け入れ先ができたことや「まち飛びフェスタ」という地域全体を舞台とする催しが定着していたことが要因ではないかと考える。5章でも述べるが、平成21年には「神楽坂伝統芸能2009」、その発展として現在では東京都が出資して「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」という伝統芸能祭も行われており、まち全体を舞台としたイベントがもう1つ増えた形となっている。このようにまちを盛り上げる装置の多様化が進むことは、神楽坂の魅力を新たに開拓することに繋がっている。また、まちを舞台にしたイベントである「まち飛びフェスタ」

が根付いているからこそ、新しい企画が生まれてくる環境ができたのだ。

4-3 「地区計画」策定への道筋 —第4・第5の敗北—

NPO 粋まちが設立され、神楽坂のまちを守る施策が行われている中で新たな再開発計画が浮上する。「K-2 計画」と「14 階建てマンション計画」である。

K-2¹²計画とは、神楽坂通りに面した店舗 7 軒分とその裏にある小栗横丁までの範囲で行われた再開発事業である。これらの土地の権利を東京理科大学が買い取って共同ビルを建設してビル完成後は地権者が店舗や住宅を取得し、残りを理科大が施設として使用する計画であった。この計画の前に、理科大学神楽坂校舎の超高層化構想計画があり、道路幅員 4m の小栗横丁を 6m に拡張することが前提になっていた。それは、都条例に基づく駐車場附置義務では駐車場の出入り口には 6m 以上の幅員の道路とすることが義務付けられていたからである。神楽坂商店会は「まちづくり協定」に基づいて理科大や地権者との間で「協定運営委員会」を実施した。また、NPO 粋まちや積極的にまちづくりを行ってきた商店主たちは、理科大の超高層化構想に対しても異議を申し立てていたという。商店会の中では、「大学だからいいのではないか」という意見も出ていたそうだが、当時 NPO 粋まちの理事であった T 氏は、「北に高層マンションができて、南にも理科大の建物ができてしまったら神楽坂は高層な建物で囲まれてしまう。絶対に許してはいけなくて強く反対した」と語ってくれた¹³。その後、「協定運営委員会」の開催中に、新宿区が区内の「絶対高さ制限」を施行したため、理科大の計画は変更を余儀なくされた。最終的には小栗横丁の幅員は 4m として設計変更を行い、都条例の義務に関しては行政側と話し合いを進めることになった。ここでの論点は、神楽坂通りに面した場所は地権者によって平成 9 年に「まちづくり協定」が結ばれていたが、果たしてその効果があったのかということである。協定は神楽坂通りに面している地権者等の同意を得たからとは言え、法的に拘束力はない。この計画が持ち上がってしまったことで、「守る義務はない」と考える地権者が出てくる可能性が生じた。「まちづくり協定」は建物を建設しようとするものやその地権者が協定の意味を理解して協力しようという意思がなければ成り立たない。協定の締結から 10 年ほどたったこの時、その意義を再認識してもらうためにはどうしたらよいか、地区計画を早めに策定する必要があるのではないかと考え始めた時期であるといえる。

K-2 計画と同じ年、平成 18 年 7 月には 14 階建てマンション計画が持ち上がった。計画地は本多横丁に近い神楽坂 4 丁目であった。裏手には路地に旅館や料亭が並んでいる場所でまたもや路地景観が壊されかねない計画が持ち上がってしまった。4 丁目ビルのケースも 6 階建てくらいの高さ制限がかかるはずだったが、施主側は土地を集約し、違法ではない形で計画を立てていた。この地区では、法的ルールを定めるための地区計画づくりを進めてい

¹² K-2 は「神楽坂 2 丁目共同ビル」の略称である。

¹³ 平成 28 年 11 月 10 日聞き取り調査実施。

るところであったが、広い道路と狭い路地が入り組む地形的な事情と地区内にある理科大の施設建て替え計画も絡み、計画策定が遅れていた。もう少し策定が早ければこのビルは建たなかったと後悔する声も聞かれた。この計画地の隣には旅館「和可菜」があり、著名な作家、脚本家が執筆のために訪れる旅館としても有名で、抗議署名に協力を申し出る作家もいた¹⁴。この1件があつてから、まちも行政も地区計画を早急に策定しなくてはいけないと認識したという。「まちづくり協定」が高層ビル建設の抑制剤として機能しなくなってきたことを実感する2つの敗北であつたといえよう。そして、平成19年に念願の「神楽坂三・四・五丁目地区」の地区協定が決定し、建物の高さが制限されることになった。

4-4 ロケ地としての繁栄

◆「拝啓、父上様」の放映

平成19年1月～3月、フジテレビで放映された嵐の二宮和也さん主演のテレビドラマ「拝啓、父上様」で神楽坂は一躍人気エリアとなる。神楽坂の料亭を舞台に倉本聰さんが書き下ろした「理想の父親とは」を軸に展開するドラマである。高層マンション建設問題が持ち上がり、一平(二宮)が働く料亭「坂下」が存亡の危機に合うという話が出るリアルなストーリーであった。この高層マンション計画は、平成18年に持ち上がった4丁目の14階建てビル建設計画を参考にしたとされている。脚本を書いた倉本氏は神楽坂について以下のように語っている。

「神楽坂っていう町は、本当に和と洋が混在している町で、古いものと新しいものの両方がよく同居している。例えば今、東京の町で失われちゃった古い八百屋さんとか銭湯とか、そういったものが依然としてある。かと思えば、古い料亭がどんどん潰れていって、そこに新しいビルが建つ。そういう風に世代交代していくんですね。なんというか町は人生そのものなんです。それが神楽坂に凝縮されているなって感じがあって。古いものを大事にするきちんとしたしきたりも、花街ですら残っている。その両方のコンビネーションの魅力というものがあって。そこを舞台にして書きたいなという思いがありました¹⁵」

「町は人生そのもの」でそれが「神楽坂に凝縮されている」ということは、神楽坂の商店主たち一人ひとりが町の構成員であると理解しているからこそ感じられることではないだろうか。また、「古いものを大事にするきちんとしたしきたり」はまさに「粋」であり、この神楽坂に根付いている「粋な」精神が脚本家に伝わっていることがわかる。そして、神楽坂は東京では忘れ去られている循環する町として再評価されていると考えられる。また、ドラマの特徴として、ロケの9割を神楽坂の街中で行い、実際の店が数多く登場する。兵庫横

¹⁴ 2006.06.11 毎日新聞の記事『高層マンション計画:揺れる花街・神楽坂 文人も交え騒動に』から

¹⁵ 『拝啓、父上様 オフィシャルガイドブック』p47のインタビューより引用

丁や小栗横丁の熱海湯階段等、「しつらえともてなしの路地¹⁶」とされている伝統的な路地も登場し、神楽坂の路地の情景とその魅力をお茶の間に届けた。以前からメディアに取り上げられることはあったが、この放映後、若者から年配までロケ地巡りをする人々が訪れ、より雑誌やテレビでまちが取り上げられることになった¹⁷。その上、ロケ中に主演の二宮を匿う場所として毘沙門天を利用したという噂¹⁸があり、毘沙門天の境内には、嵐から始まりジャニーズファンの絵馬が非常に多く見受けられる。「2015年はありがとうございました」と書かれた絵馬もあることから、現在でもファンたちが神楽坂を訪れていることがわかり、このドラマがまちに与えた影響が大きいことがわかる。しかし、放映された当時は喜ぶ声ばかりではなかったようだ。路地で騒ぐものがない、神楽坂の魅力として挙げられている江戸情緒が汚れるのではないかと危惧する見方もあった。しかし、現在では神楽坂の伝統的路地空間に一步足を踏み入ると、自然と小声になって物音を立てずに進まなければいけないという空気感が漂っており、訪問者は自然とマナーを守るといふ。また、住民側も神楽坂を観光しにくる人々が居るといふ状態に慣れて理解をしているという。

◆路地の火災と拡張

ドラマが最終回に近づいた、平成 19 年 3 月 19 日昼過ぎ、飲食店から出火し、木造二階建て建物計 5 棟を焼失してしまった。現場は、石畳の狭い路地に料亭などが密集する「かくれんぼ横丁」、鎮火するまで約 8 時間もかかったようだ。焼失した場所に新たな建物を建てるには、建築基準法の規定で、路地の幅を広げなければならない。かくれんぼ横丁は昭和 30 年代の雰囲気を残し、ドラマ「拝啓、父上様」のロケ地にもなった場所である。神楽坂の路地は、建物の間口を狭くし、表面を揃えることで景観を維持している。それがセットバックしてしまうことによって連続性がなくなり、壊れてしまう。大阪市にある法善寺横丁は平成 14 年そして翌年と連続して火災が起きたが、その後市民の要望を受けて市が特例を適用。路地幅をほぼ変えず復活したという。この事例をもとに住民も動いたが、叶わなかった。火災現場に面した約 20 メートルの路地は片側だけ約 1m セットバックすることになってしまふ¹⁹。

細い路地を持ち、料亭が多く存在していた神楽坂には古くから独自の防災システムがあった。それは昭和 40 年頃に作られた防犯ベルで、10 軒ほどのまとまりで火災や強盗など何かあったらすぐにわかるように軒下に設置されていたが、現在では機能していないようだ。牛込消防署が近くにあるため、町独自の防災意識を高める活動で特殊なものはないが、町の人々の火災の予防に関してはそれぞれが予防を行い、火事が起きないように気をつけているという。また、このかくれんぼ横丁での火災は路地に店を構える飲食店にとっては防火

¹⁶ 2 章 2-4 神楽坂の路地空間を参照

¹⁷ 2007.03.20 朝日新聞 夕刊『神楽坂で人気、ドラマで満開 「拝啓、父上様」ロケ地巡り』より

¹⁸ NPO 粋まち元理事 T 氏のお話より

¹⁹ 2007.05.08 読売新聞 夕刊『石畳の横丁…東京・神楽坂風情の危機 火災で拡張必要に 地元「特別措置」を』から

意識を高めることに繋がった出来事であったといえる。

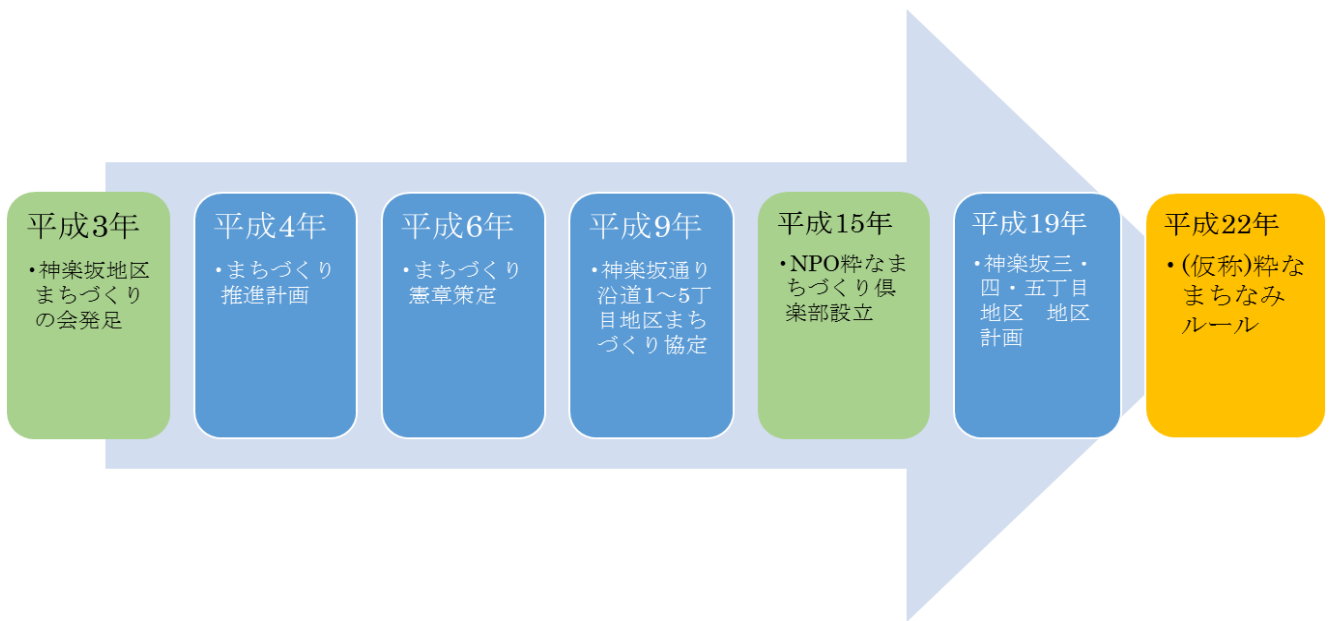


火災によりセットバックした路地(筆者撮影)

4-5 まちの未来と路地を守るために

飯田濠再開発から 14 階建てマンションまで、大小含めて 5 つの争いと敗北を経験した NPO 粋まちや神楽坂通り商店会が、新たなルールを作った。平成 3 年に「神楽坂地区まちづくりの会」が発足し、「まちづくり推進計画」が作られた。自主的な活動が継続し、平成 6 年に「まちづくり憲章」、平成 9 年に「神楽坂通り沿道 1~5 丁目地区まちづくり協定」が締結された。その後、平成 19 年には「神楽坂三・四・五丁目地区」地区計画が策定され、まちづくりのルールが重ねて作られてきた。しかし、今まで述べてきたように、地区計画ができる以前までは路地の景観を脅かす開発が行われてきたことも事実である。そこで、まちが受け継いできた粋を次世代に繋げるため、「まちづくり憲章」をもとに作成したのが、「粋なまちなみルール(仮称)」である。まちの人々が主体的に運営する仕組みを提案した。このルールは、まちなみや建築など目に見える「かたち」に対する基準を中心に定められているが、その根拠にある「粋」を意識したものになっている。神楽坂のまちづくりがスタートした 1990 年代への原点回帰、そして 5 つの敗北で得た教訓をまとめたまちのルールとなった。

ルールの適用範囲は神楽坂 1~5 丁目沿道地区および伝統的な路地界隈を中心としている。また、検討主体は、NPO 粋まちであるが、まちづくりの意思決定の主導権をもっているわけではないので、神楽坂を愛して住み続けている人々の意見を取り入れて提案をまとめ、まちづくり興隆会や区に提案しているという。



粋なまちなみルールができるまでの過程(筆者作成)

以下にその「粋なまちなみルール」の中の「神楽坂粋なまちなみ七規範」と「路地界限粋なまちなみ七規範」を紹介しておく²⁰。

「神楽坂粋なまちなみ七規範」

(神楽坂通り 1～5 丁目沿道地区 粋なまちなみルール)

① まちのヒューマンスケールを保つ
② みちと建物の親密な関係を保つ
③ 建物の高さを揃え、周辺と調和させる
④ 1階の用途は神楽坂通りにふさわしく
⑤ 外装は素材感を活かし、周辺との調和や連続を
⑥ 出入り口は美しく、ゆとりを持って
⑦ サイン、看板、照明は歩行者が快適に楽しめるように

²⁰ 『神楽坂キーワード第2集 粋なまちづくり過去・現在・未来』 pp194～201 より、7つの要素だけ紹介、詳細な規定は省略している。

「路地界限粋なまちなみ七規範」

(伝統的路地界限 粋なまちなみルール)

① 路地を拡げない、路地をなくさない
② 神楽坂らしい路地界限のスケール感を守る
③ 路地のまちなみの連続性を保つ
④ 路面の仕上げは自然石で
⑤ 外装や外構は素材感を十分に活かし、周囲との調和したものに
⑥ サイン、看板、照明は路地空間になじむように
⑦ 路地を使う作法を守り継承する

このルールの中で評価されるべきところは、路地界限のルールを作っていることであろう。今までは神楽坂1～5丁目地区全体に定めたルールがほとんどであった。そこに路地界限独自の規範をつくることは、高層マンションの出現により路地の景観が壊されてしまったからこそだといえる。神楽坂にとって伝統的な路地界限は大切なアイデンティティであり、1度壊れたものは戻らない、だからこそ守らなくてはいけないと学んだのではないだろうか。

NPO 粋まち理事のS氏によると、平成22年に興隆会に提案し、区長が参加したシンポジウムで公表したが、「粋なまちなみルール」は現在でも「地域でオーソライズされたものではない」という。しかしながら、住民主体で作成したまちづくりルールという認識はまちづくり関係者の中で共有されており、一定の評価は得ているようだ。また、飯田濠再開発から約40年間、現役でまちづくりに関わってきた人々にとっては過去の敗北の記憶を残し、今後まちづくりを担っていく者へのメッセージとしてルールを作成したと考えることができる。このルールを地域でオーソライズされたものにする事ができれば、神楽坂のまちと路地空間は地域全体で守るべきものとして認識され、不必要な開発を防ぐことができるようになるだろう。そして、これからのまちづくりを担う次世代へと「粋」の精神を継承する重要なルールとして位置づけられる。

5章 神楽坂のこれから

5-1 神楽坂の今

現在も神楽坂は、ランチタイムや祝祭日の歩行者天国になると道が埋め尽くされるほどの賑わいをみせている。平成24年度の1日当たり平均乗降者数は約38000人で、地域住民の約10倍である。有名店は雑誌やメディアに続々と取り上げられ、並ばずに入れることはほとんどないという。しかし、その裏で老舗や経営が難しくなった飲食店は閉店し、新しい店舗ができるというサイクルがそこかしこで起きている。筆者は約3年間、神楽坂に近い飯田橋駅西口近くの居酒屋でアルバイトをしており、神楽坂・飯田橋エリアの飲食店の話を聞くが、繁盛している店とそうでない店の差が大きくなっているように感じる。神楽坂の商店会はサイクルが早い飲食店だけでなく、雑貨店や小物屋など物販店を如何に増やして、お客を飽きさせない仕組みがつけられるかが今後の繁栄の鍵になると考えられる。

新たな動きとしては、平成25年から東京都の出資により、まち全体を芸能の舞台にするイベント「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」が開催されている。このイベントは、毘沙門天や歩行者天国となった神楽坂通り、飲食店や商店、伝統的路地界隈や寺内公園など様々な場所が舞台となり、落語やお囃子、琵琶や和太鼓、尺八など日常生活では触れることがない伝統芸能を気軽に見て聞くことができる。



山下漆器店前で行われている演奏(筆者撮影)

4回目となる平成28年度はアーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)に加えて、NPO 粋まちも主催となり、地元住民とともに作り上げるイベントになりつつある。筆者は、このイベントに合わせて行われる「神楽坂タイムトリップ」というスタンプラリーと歴史ガイドのボランティアとして参加した。スタンプラリーは、毘沙門天・光照寺・圓福寺・赤城神社・寺内公園・軽子坂上・若宮公園の7箇所を巡り、7つのスタンプをあつめた参加者は記念品がもらえるというものだ。ボランティアの中には近隣スターバックスコー

ヒー3店舗の店員、信用金庫の社員、法政大学の留学生が数多く参加しており、周辺地域の企業で働く人や大学生が積極的に協力している姿がみられた。今後はそのような人々と地域住民との交流がこのイベントを通して広がっていくのではないかと期待される。

また、雑誌やテレビで多く取り上げられる弊害として、情報が溢れてしまい神楽坂の正確な情報が次世代に伝えられないということがあるという。1つの例としては、メディアが作った「奥神楽坂」という言葉がある。「奥神楽坂」は大久保通りを越えた神楽坂6丁目あたりから矢来町などを指す言葉のようだが、地域住民はそのような名称で呼んだことはないという。NPO 粋まちは、地域情報のナレッジマネジメントを行うために、2年ほど前から「神楽坂検定」を実施・運営している。検定前には神楽坂を知るセミナーが開催され、テキストも配布される。平成27年度は初級だけであったが、平成28年度は初級と中級を実施する。「粋なまちなみルール」に加えて、神楽坂の正確な歴史を後世へ繋ぐものになると考えられる。

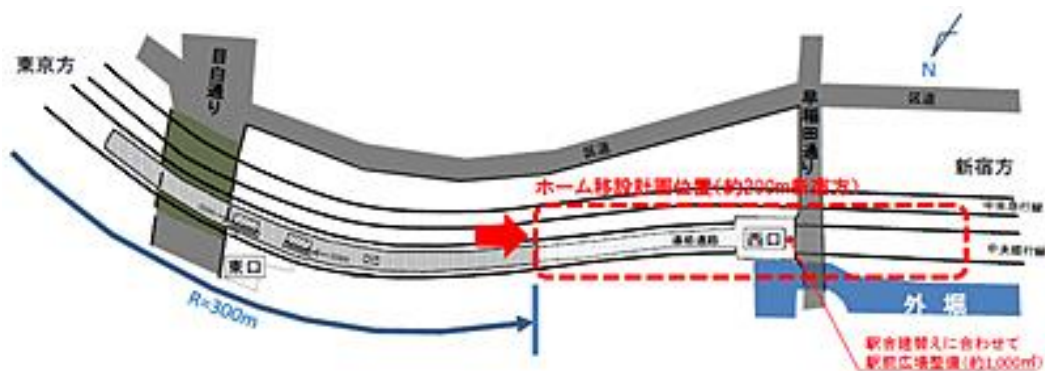
5-2 今後の課題

今後、神楽坂にも大きな影響を与えるだろう計画が2つ挙げられている。1つは、大久保通りの拡幅計画である。これは昭和21年に震災復興の一環として東京都によって都市計画決定されたもので、その後今日に至るまで事業化されていなかった。しかし、近年になって計画が実行され始めているといい、坂上交差点付近でも道路用地の買収が始まっている。計画区間は筑土八幡町から抜弁天までで、都市計画道路としては現行幅員18mを30mに拡幅することになっている。また、都の事業計画として、現在片側1車線のところを2車線として自転車レーンを設け、歩道幅員は6mとされている²¹。この拡幅計画で懸念されているのは、神楽坂1～5丁目地域までと6丁目地域から先の地域の分断である。現在でも大久保通りを隔てているため、商店会同士やまちづくりを考える上で違いが出る部分があるというが、祭や地域のイベントは一体となって行われている。それが30mもの道路ができてしまうと完全に分断されてしまうと地域住民や商店会は不安を隠せないという。まだ道路用地の買収が始まったばかりだが、2020年に行われる東京オリンピックの影響で他の開発とともに連動して行われると考えられている。今から拡幅が行われても地域の連続性を損なわないような仕組みを考えていかななくてはならない。

もう1つは、飯田橋駅西口の改装工事である。平成28年の夏に飯田橋駅西口が閉鎖され、仮設の改札口が駅の南側に取り付けられている。改装工事の理由は、「飯田橋駅のホームは急曲線区間にあり、列車とホームの隙間が大きくなっているため、ホームを現在の位置から約200m西側に移設し、列車とホームの隙間を小さくする工事を行う」ということだ²²。

²¹ かぐらむら『大久保通り拡幅計画と神楽坂らしいまちづくり』より引用

²² JR 東日本 HP より引用



『飯田橋駅改良平面図』JR 東日本の HP より

この改装計画に付随して、駅に接続する商業施設の建設の話が挙がっているという²³。もしこの計画が実行されることになれば、飯田橋から神楽坂に向かう人々の流れが閉ざされてしまう可能性がある。また、この西口周辺には牛込御門の石垣が残っており、神楽坂の発展を後押しした牛込御門の歴史の跡をもなくしてしまいかねない。まだ解体作業が始まったばかりであり、いつまでに飯田橋駅の改装が終わるのか、駅と接続する商業施設ができるのかどうかは定かではないが、神楽坂の繁栄に少なからず影響する開発であると考えられる。

神楽坂を取り巻く環境は、現在でも目まぐるしく変化している。過去の開発に見られる通り住民には知らされず、水面下で計画が進行している場合もある。また、飯田濠再開発から現役でまちづくりに関わってきた商店主や地元住民は高齢化を迎え、数年後には世代交代を余儀なくされるだろう。現時点でも今まで神楽坂が重ねてきた記憶をまとめる作業が行われているが、それを如何に次世代に繋げることができるかが重要になってくる。それができれば神楽坂は東京がなくなってしまった心、「粹」を残したまちとして繁栄を続けることができると考えている。

²³ 「神楽坂まちづくりの会」元会長の S 氏のお話より。

終章

終-1 総括

◆本論文の振り返り

本論文は都市再生の再開発とは対局する路地空間の維持に着目し、路地を含めたまちを守る組織の動きや連携を考察して路地を守ることの意味とその方法を導き出すことを目的としてきた。

序論では、筆者の問題意識を入口に、論文形式と研究方法を記した。

1章では、路地空間がどのような空間であるか、そして路地があることの効果をジェイン・ジェイコブズの都市に多様性を生み出す4つの条件から整理した。また、小泉(2006)から路地が喪失に向かう現状があることを再認識した。路地があることの良さとその路地が壊されていることを踏まえた上で、2章から5章までは神楽坂に焦点を当てて、時系列でまちの変容とその対応を見ていく。

2章では、神楽坂の概要として終戦までの歴史と現時点で存在する地区計画などを取り上げた。神楽坂の街区は江戸の武家屋敷から町屋へと変化した時期から変わっていないというところが後に関わってくるポイントとなる。

3章と4章では、人々の反対運動やまちづくり組織の結成などとともに、飯田濠再開発から粋なまちなみルールの提案までまちの景観、路地からの景観が変わっていく様子を追った。その中で、飯田濠再開発の時に戦った2代目・3代目若手の商店主たちが現在まで神楽坂のまちづくりに積極的に関わってきていることがわかった。そして、敗北の歴史が彼らの記憶と経験の中に重なっていき、その教訓を生かすための着地点として粋なまちなみルールを作成した。また、路地の価値とその保全を意識し始めたのは、高層マンションの建設により路地が喪失、景観が破壊された時である。これは全国路地サミットが始まった時期でもあり、全国的に再開発の波が押し寄せて神楽坂もそこで路地を守る活動を始めたという社会的背景もある。しかし、15年ほど前の出来事からまちが危機を感じ、粋なまちなみルールとして路地の保全に関する詳細な規範を提案するに至っていることは評価すべき事柄であるといえる。そして、そのルールの策定までまちづくりを立ち止まることなく進めることができたのは、NPO 粋まちという「要」ができたからであるといえる。

5章では、現在の神楽坂として新しいまちを舞台としたイベントができたこと、次世代へと記憶を繋ぐ準備が進んでいることを取り上げた。また、今後起きるだろう開発から、これからも神楽坂というまちの戦いは続くことを示唆した。しかし、NPO 粋まちがまちと共に積極的に動いていること、神楽坂ファンや専門家を巻き込んでいることを鑑みると、神楽坂の「粋」は今後も存続するのではないかと希望を込めながら終わりにする。

序章

【問題意識】

- ・路地を守るのは誰か
- ・路地を活かしたまちづくりとは

1章 路地に関する先行研究

- ・路地とは、残るべくして残された空間
- ・多様性を生み出す場として機能している
- ・路地が喪失し続けている現状

神楽坂から紐解く

2章 神楽坂の概要

- ・神楽坂の歴史(江戸から終戦まで)
- ・神楽坂の3つの路地空間(しつらえともてなし・にぎわい・生活系)

3章 神楽坂の記憶

3-1 まちの形が残った戦後の復興
まちの骨格に歴史が残る

3-2 若手が立ち上がった反対運動
地域は一枚岩・次世代の活躍

3-3 「粹な」まちづくりのスタート
「まちづくり協定」の締結

3-4 超高層マンションの出現と路地の喪失
路地の価値の再認識
まちの分裂・外部との連携

4章 神楽坂のまちづくり

4-1 まちをまとめる組織の誕生
「扇の要」NPO 粋まちの誕生

4-2 まちを盛り上げる装置の多様化
地域内外のネットワーク構築
路地の魅力を伝達

4-3 「地区計画」策定への道筋
法定ルール的重要性を再認識

4-4 まちの未来と路地を守るために
着地点としての
「粋なまちなみルール」の作成

5章 神楽坂のこれから

- ・次世代へと記憶を繋ぐ取り組みと新しいムーブメント
- ・大久保通りの拡張と飯田橋駅の改装工事

◆本論文の意義と到達点

本論文では、「神楽坂の路地空間を維持したまちづくり」を解明してきた。中でもその到達点として以下の3点がある。

- ① 神楽坂が路地を維持したまちづくりにたどり着くまでの過程を明らかにする
- ② まちの組織連携とそれぞれの役割を明らかにする
- ③ ①と②を踏まえて神楽坂で地域主体のまちづくりを行うことができた端緒を掴む

神楽坂地区は建築や都市計画の専門家の視点から研究がなされている地域である。その中で「路地を守る」という動きに着目して、その過程を明らかにすることには価値があると考えられる。①に関しては、神楽坂のまちが整った時代の歴史から、まちを守ろうと奮闘してきた人々の敗北からの学びとまちの組織の連携を整理することで、神楽坂が歩んできたまちづくりの展開を明らかにすることができた。

次に②に関しては、4章でNPO 粋まちが設立したことで組織連携が可能になったこと、企業や専門家との連携も強固になったことを明らかにした。また、まちの盛り上がりをも助長する装置として多様な主体でイベントが開催されていることも示した。

最後に③に関して、筆者はそこに生きる人々が望むまちを作ることこそが「まちづくり」であると考えている。「路地を守る」ことはそれ以前に「まちを守る」ということが必要であり、神楽坂ではまち全体からその構成要素としての路地へとまちづくりの段階が進歩していることがわかる。その大きな要因として5つの敗北という経験がまちの人々の記憶に重なったことがあると明らかになった。また、「粋」という精神が次世代へと引き継がれていくことがまちづくりの継続の鍵であることも示すことができた。神楽坂のまちでは伝統的路地空間が地域の守るべき宝であるという共通認識ができており、ヒューマンスケールなまちで有り続けることが神楽坂のまちがとった選択であるのだ。最終的に神楽坂のようにまち全体そして地域特有のものを守り続ける希望の筋道と重要性とを述べたかったのだが、そこまで辿り着けなかったことは力不足であった。

終—2 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々に支えていただきました。その方々にこの場をかりて感謝を申し上げます。

まずは、NPO 法人粋なまちづくり倶楽部、神楽坂まちづくりの会、神楽坂商店会をはじめとした神楽坂の皆様。ボランティア活動を通して、皆様の神楽坂に対する愛情を肌で感じました。また、NPO 粋まちの寺田様にはインタビューの時間を設けていただいた上に、資料の提供もしていただき、論文の中核部分をより詳しく書き進めることができました。その他にも、NPO 粋まち理事の皆様には論文の内容に関わる情報をボランティア活動や説明会、まちあるきの中で聴かせていただきました。活動に参加すると、「今日もありがとう」と声をかけてくださり、非常に嬉しく思っておりました。今後も継続して神楽坂のまちづくり活動に参加していきたいと考えております。また、路地のある地域を選ぶ際、非常に迷ったことを覚えています。神楽坂を選択したことは正解だったと断言できます。ありがとうございました。これからも何卒よろしく願いいたします。

次に、文化構想学部現代人間論系助手の川副様。過去に神楽坂の旅館和可菜で働いていたころのお話や博士課程の論文で神楽坂を扱われた際の話をお聞かせいただいた上に、論文の構成やまとめ方についても相談させていただきました。神楽坂にゆかりがなかった筆者にとって先行研究者が身近にいたことは非常にありがたいことでした。お世話になりました。

そして、ゼミ論構想発表時にアドバイスを下さった先輩方、共に悩みを共有しあい刺激を与えてくれた同期、私の発表を真剣に聞いてコメントをしてくれた後輩。多種多様な人材がいる浦野ゼミナールで学べたことを嬉しく思っています。

最後に、テーマ設定から執筆に到るまで熱心にご指導下さった浦野教授。私のまとまりがない発表にもアドバイスをくださり、見守ってくださいました。そして、草稿提出後はよりよい論文が出来上がるようにコメントをくださいました。誠にありがとうございました。

ゼミ論文との長い付き合いの末、このように 1 つの論文として形に残せたのは、私だけの力では成し得なかったことです。先生、先輩、同期、後輩、家族、そして私の生活を周りで支えてくださった方々の協力あつてのことです。

皆様、お世話になりました。ありがとうございました。

参考文献／参考 URL

【参考文献】

- ・青木仁 2007年7月 『日本型まちづくりへの転換 ミニ戸建て・細路地の復権』
- ・宇杉・青木・井開・岡本 2010年1月 『まち路地再生のデザイン 路地に学ぶ生活空間の再生術』
- ・上田篤・田端修 2013年2月 『路地研究 もうひとつの都市の広場』
- ・岡本哲志 2006年8月 『江戸東京の路地 身体感覚で探る場の魅力』
- ・神楽坂キーワード第2集制作委員会 平成22年2月 『神楽坂キーワード第2集 粋なまちづくり 過去・現在・未来』
- ・神楽坂地区まちづくりの会 平成9年6月 『粋なまち神楽坂から まちづくりキーワード集』
- ・神楽坂地区まちづくりの会 平成6年3月 『神楽坂楽楽散歩』
- ・神楽坂まちづくりの会 平成4年6月 『神楽坂地区まちづくり推進計画(案)』
- ・加藤政洋 2005年10月 『花街 異空間の都市史』
- ・財団法人新宿区生涯学習財団 新宿歴史博物館 学芸課 平成13年3月 『新宿区の民俗(5) 牛込地区篇』
- ・財団法人都市計画協会 平成19年11月 『新都市』
- ・清水忠男 1998年6月 『ふれあい空間のデザイン』
- ・ジェイン・ジェイコブズ(山形浩生訳) 2014年1月 『[新版]アメリカ大都市の死と生』
- ・立壁正子 平成13年2月 『ここは牛込、神楽坂 第18号』
- ・田端修 2010年5月 『「和」の都市デザインはありうるか 文化としてのヒューマンスケール』
- ・鳴海邦碩 2009年10月 『都市の自由空間 街路から広がるまちづくり』
- ・西村和夫 平成22年10月 『雑学神楽坂』
- ・西村幸夫 2006年12月 『路地からのまちづくり』
- ・フジテレビ出版 2007年3月 『拝啓、父上様 オフィシャルガイドブック』
- ・増淵敏之 2012年11月 『裏路地が文化を生む! 細街路とその境界の変容』
- ・宮崎洋司・玉川英則 2011年5月 『都市の本質とゆくえ J・ジェイコブズと考える』
- ・渡辺功一 2007年8月 『神楽坂がまるごとわかる本』
- ・NPO 法人粋なまちづくり倶楽部 2013年4月 『粋なまち神楽坂の遺伝子』
- ・NPO 法人粋なまちづくり倶楽部アーカイブズチーム 2007年10月 『まちの思い出をたどって』

【参考 URL】

- ・石井要吉 かぐらむら 街並み日々試行錯誤『第五回 「地区計画」の施行にむけて』
<http://kaguramura.jp/symphony/machinami/%E7%AC%AC%E4%BA%94%E5%9B%9E%E3%80%80%E3%80%8C%E5%9C%B0%E5%8C%BA%E8%A8%88%E7%94%BB%E3%80%8D%E3%81%AE%E6%96%BD%E8%A1%8C%E3%81%AB%E3%82%80%E3%81%91%E3%81%A6>
- ・鈴木俊治 かぐらむら『大久保通り拡幅計画と神楽坂らしいまちづくり』
<http://kaguramura.jp/information/%E5%A4%A7%E4%B9%85%E4%BF%9D%E9%80%9A%E3%82%8A%E6%8B%A1%E5%B9%85%E8%A8%88%E7%94%BB%E3%81%A8%E7%A5%9E%E6%A5%BD%E5%9D%82%E3%82%89%E3%81%97%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%A1%E3%81%A5%E3%81%8F%E3%82%8A>
- ・東京新聞 2016年4月13日朝刊 『新宿ゴールデン街火災 狭い路地が消防車阻む 3棟燃え1人けが』
<http://www.tokyonp.co.jp/article/national/list/201604/CK2016041302000132.html>
- ・JR 東日本 HP
<https://www.jreast.co.jp/construction/newstation/>